

奥さん、貸した金が払  
えないなら身体で払っ  
てもらおうか！

筆先文十郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夫と離婚し身体をもてあます若い母親に、金を貸した男が身体で借金返済をするように強要する物語です。

(別作品あり)。

# 目次

奥さん、貸した金が払えないなら身体で 払ってもらおうか！	1
お嬢ちゃん、今何でもするって言ったよ な？	7
女スパイ・屈辱的拷問	15
女スパイ・屈辱的拷問後日談	19
天涯孤独の少女は父の親友に徹底的に調 教される	22
催眠女子高生・夢宮綾芽く改造サレテイ ク肉体く	26
敗北の姫騎士マリアンヌく平民に落とさ れた王女の行方く	31

『奥さん、貸した金が払えないなら身体で 払ってもらおうか！』のぶっちゃけ	38
夜。汚れなき花は散る	41
女スパイ・屈辱的拷問2く白濁陥落く	48
親父が隠していたAVを、俺は見る!!	57
悪魔の囁きに負けて……	65
魔法少女シャイニングピースくどうだ、 この熱々の長い○○○の味は	71
魔法少女シャイニングピースくお願いだ から、私を犯してよ！く	76

魔法少女シャイニングピースを我妻（あづま）深雪（みゆき）が視聴していたら

81

悪堕ちの女勇者ミレイアと正義の刃が悪

へと変わる（前編）と

84

催眠術に目覚めた男子生徒の凶行と穢さ

れたマドンナと

91

僕の目の前で彼女は寝取られる……

102

デスランスの恐るべき技（という名前の

黒歴史）

105

へへへ、安心しろ。すぐに楽しい所に連れて行ってやるからなく屈強な男たちに

突然拉致された私と

115

美人教諭カヲルと斬り裂かれた衣服と晒

される素肌と

118

私の彼を取らないで！彼氏と姉の熱い吐

息

125

奥さん、貸した金が払えないなら身体で払ってもらおうか！

「じゃあお母さん。行ってくるね♪」

「ええ、気をつけるのよ」

ランドセルを背負う娘を母、橘朝子は笑顔で見送る。どこにでもある日常の風景だ。だが、そんな微笑ましい光景は一瞬で終わりを告げた。一人の男によって。

「いやあ、美しい光景ですな。奥さん」

朝子が振り向くと、そこにはパンチパーマにギラギラした目つきをした男がニヤニヤと愛娘を送り出した母親を見ていた。

「さ、鮫島さん……」

一目見ただけで普通の人間ではない男が自分の前に現れた理由を知っている朝子は、ガタガタと身体を震わしながら「こ、ここだと人目がつくので」と男を自分が住んでいるアパートの自室に案内した。

「奥さん。俺がここに来た理由、もうお分かりですよね？」

「……………あ、あの」

視線を伏せ、震える身体で朝子は言葉をつむぐ。

「もう少し、もう少しだけ……………待ってもらえないでしょうか……………」

涙をためて、震える声で朝子はお願ひする。

彼女は目の前の男に借金をしていた。数年前に夫のDVが原因で離婚し、その後夫が傷害事件で捕まったため慰謝料や教育費が望めなくなった。頼るべき親類がいない朝子にとって子育てと仕事の両立は困難を極めた。

自分の生活と愛娘のため、朝子は男から借金をした。しかし今までスーパーの販売員のパートしかしていない彼女に転職が上手くいくわけがなく、生活が苦しくなるたびに男から借金をして、ついには数百万になってしまったのだ。

「ふう〜」

男はポケットからタバコとライターを取り出し、携帯用灰皿にタバコを捨ててから口を開く。

「奥さん。俺は慈善事業をしているわけじゃないんですよ。10ヶ月3%の単利なんて貸し金業界だったら『お前はお人よしか?』ってバカにされるくらいですよ」

「は、はい……………鮫島さんには、本当に頭が上がりません……………」

顔を伏せ、涙をポロポロと流しながら朝子は答える。

「それに先月も先々月も『もう少し』って言っていましたよね？で、俺待ちましたよね？なのに利子すら払ってもらえないってどういうことですか？」

「そ、それは……生活費とか、娘の進学のための準備などで……ですが次は、次こそは必ず払いますので、どうか——」

「奥さん」

静かで、それでいて恐ろしく重い男の口調に朝子は恐怖のあまり言葉をとめてしまった。

「さっきも言いましたが俺は慈善事業をしているわけじゃないんです。ビジネスで奥さんに金を貸しているわけです。借りた物は返す。これはガキでも分かることです。でも奥さんは払おうとしない」

「ですから、来月は……来月には利子分を——」

「信用できると思ってるのか？」

先ほどと同じく声の音量こそ同じなもの、先ほど以上にドスの利いた声に恐怖に震えるシングルマザーは完全に声を失った。

「仏の顔も三度まで。三度目はないんだよ」

「……ッ」

恐怖に震える女性を、男は舐めるように見る。

30代近いとは思えないピチピチの肌と大学入学したてと思える幼い顔立ち。しかしその顔の下の肉体は幼い容姿と半比例するかのような大人の身体をしていた。

子どもを生んだ身体とは思えないほど引き締まり、胸元は巨漢な男の手のひらに余りそうなほど大きく盛り上がっている。そのたわわな乳房の膨らみから一気にくびれる健康的なウエスト。そしてムチツと張り詰めた臀部<sup>でんぶ</sup>。スカートから生える細く長い脚。幼い顔立ちと胸の大きい大人のプロポーションは一種のアンバランスを生みだしていた。

「……あ、あの。何でしょうか?」

男のいやらしい視線を感じ、朝子は思わず胸元を隠した。

「奥さん。もう分かってんじゃないですか?」

「え?……ヒイツ!?!」

突然の言葉に思わず疑問の言葉を残す女性に、男は目の前の女性の顎をクイツと持ち上げる。

「今ここで払えないと言うんなら、身体で払ってもらいましょうか」

「そ、そんな……身体って……」

「身体で。払ってもらいましょうか」

「は、はい……」



有無も言わさぬ男の威圧感に、朝子は「はい」と答えるしかなかった。

追い討ちをかけるように男はいやらしい笑みを浮かべながら言った。

「なあに、奥さんみたいな身体を持っていたら。すぐに借金が返せるほど男が来ますよ。そう……たくさんね！」

数日後。

「朝子さん。俺、牛丼セット一つ!」、朝子さん、こっちは日代わり定食!、「朝子ちゃん。焼き魚定食ね!」

「はい!かしこまりました!!」

朝子は嬉しそうに男性客の注文を受けていた。

朝子は男が店長を務める飲食店のホールスタツフになっていた。

朝子のギャツプのある顔と身体に多くの男性客が虜とりことなり、男の飲食店は大繁盛していた。

「店長!注文お願いします!!」

「あいよ!」

注文された料理を作りながら、パンチパーマの料理長は言った。

「奥さん。このまま売り上げに貢献してくれればその分利子や借金を帳消ししてやる

よ。それに娘さんの分のまかないも作ってやる。だから、きっちり身体で払うんだな  
！」

「はい、店長！」

こうして橘朝子は男の店で、身体で借金返済に努めるのであった。

お嬢ちゃん、今何でもするって言ったよな？

それは突然のことだった。

「ええ？」

チアガール部のキャプテンを務めるほどの容姿と実力を持つ美少女、我妻深雪が家に帰るや否や言葉を失った。

黒い服にサングラスと怪しい風貌の男達が『差押』さしおさえという札をつけて家から家財道具を次々と持ち出していたからだ。

「ちよ、ちよつとこれは!?!」

深雪は思わず声を上げる。

「なんだ?」

高級そうな黒い車からオールバックの金髪に熊や猪を倒せそうな大男が現れた。

「アంత、ここの身内のもんか?」

ナイフのように鋭い目つきで自分を見下ろす大男に、深雪は震えながら頷くしかなかった。

「まあ、嬢ちゃんも突然のことで頭が混乱しているだろうから奥で話そうや」

数分後。我妻家和室。

タンスや絵などがあつた部屋はすでに取り払われており、今あるのは座布団と机のみだつた。

今まであつたものが突然なくなっていることに深雪は寂しさを感じた。

「実はな。お前の父親がウチの事務所に借金をしていてな。借金を払わずどこかに行方をくらましたからこうして差押に來たつてわけだ」

そう言つて男は借用書を目の前で小さく震える少女に手渡す。

「……ッ！」

少女は何度も何度も借用書を見る。これが嘘であつてほしいと願つて。

だが何度見てもその借用書は父親が男の事務所に多額の借金をしており、返済が滞とどこおつた場合は家を処分しても構わないという内容のことが記しよされていた。

彼女も生活が苦しいということとはなんとなく認識していた。しかし父親が借金しているとは知らなかつた。そして、それは高校生の自分では到底返す方法が思いつかないほど大きかつた。

「ま、現実を受け入れろというのは難しいわな」

そう言つて男は借用書を取り上げ、バッグの中に収める。

「昔だったら『親の借金なんだから子どものお前が払えや!』って言えただろうけど。今の法律は親の借金の返済義務は子どもにないからな。そんなことを言うつもりはないから安心しろ」

「……」

「じゃあ嬢ちゃん。俺はアンタが父親以外親類はいないのは知っているから頼る身内はないのは分かる。でもウチもビジネスだからそんなことまで気を回していられん。じゃけんホレ」

男は懐から財布を取り出し、一万円札を放心する少女に差し出す。

「これでどっかで飯食って、どっかの安宿に泊まって。それから友達に頼るなりして今後のことを考えるんだな。あ、心配すんな。この金はこのままお前を見殺しにしたんじゃあ寝覚めが悪くなるから俺が勝手にやるだけ。『金返せや!』っていうつもりは一切ないから安心しな」

「……」

しかし少女は受け取ろうとはしなかった。

「なんや嬢ちゃん。もしかして金が足らんとか言うつもりじゃないだろうな?」

少しドスの利いた口調で男が言う。

「……ますか?」

「は？」

「どうしたら、家をこのままにしてくれますか！」

「…………へ？」

涙を流しながら訴える少女に、男は一瞬言葉を失う。そんな男に少女は涙を流し、言葉を詰まらせながら続ける。

「私、この家……大好きなんです。家は、決して裕福じゃなかったし、欲しいものを買ってもらえなかった……でも、この家は、たくさんの思い出が詰まった場所なんです！だから、私からこの家を奪わないでください。お願いします!!」

そう言つて少女は頭を下げる。

「…………嬢ちゃん」

男は大きなため息をついた後、ナイフのように鋭い目をカツと開いて少女に言い放つ。

「あのな嬢ちゃん。そんなこと言われて『じゃあ許しちゃう♪』って言うと思つたら大間違いだぞ！ウチだつてただで金を貸しているわけじゃない！貸した金が回収できなければ今度は俺らの生活がかかってくるんだ！思い出が詰まっているから？……家を奪うな？……ふざけるのもいい加減にしろよ!!」

パンツ！机を叩く男の迫力に、少女は「ヒイツ!？」とひるむ。しかし少女はそれでも

必死にすぎりつく。

「本当にお願ひします！家を取らないでください！……私がお父さんの借金を引き継ぎます！何でもします！……だから、お願ひします!!」

「ん?」

少女のある言葉に、男は反応する。

「今何でもするって言ったよな?ということはウチの会社が嬢ちゃんをどうこうしてもいい……そういうわけだ」

男は舐めるように目の前の少女を見る。

スレンダーな体つきに幼さが残る顔立ち。絹のように艶やかな黒髪をツインテールでまとめている。

漆黒の瞳を神秘的に輝かせるその姿は、処女性が感じられる生粋の大和撫子といった印象がある。

穢<sup>け</sup>れのない手つかずの花。それを力いっぱい穢<sup>け</sup>してみたい。

男の中に邪悪な欲望がムクムクと湧き立つ。

「まあ、嬢ちゃんが言うなら……考えなくもないがな」

「…………え？本当ですか!？」

男のいやらしい視線に気づいていなかった少女はパツと明るい表情で男を見る。

「ただし。嬢ちゃんにはウチの事務所に入ってもらおうよ。なあに、売れっ子になればすぐに返せるよ」

「え？売れっ子って…………どういうことですか？」

何をされるのか理解していない少女は、恐怖に震えながら尋ねる。

「そう不安がることはない。お金が稼げておいしい思いができる、素晴らしい仕事だよ」  
男は少女を下卑た視線で見回しながら、欲望にまみれた笑みを浮かべた。

数カ月後

「い、いや、やめて…………い、いやあああああつつつ!!」

箱に入れられた深雪を。大量の白い汁が、穢れの知らない可愛らしい美少女を頭から汚していった。絹のような艶やかな黒髪や幼さが抜け切れていない大人になろうとする可愛らしい顔にこれでもかとはばりつく。

「はい、罰ゲーム終了了!」

その声と共に彼女を閉じ込めていた箱が開き、深雪は外に出ることができた。

「ちよ、ちよつと高文<sup>たかふみ</sup>さん。量が多すぎでしょう!」



数ヶ月前まで女子高生だった深雪は、日本屈指のお笑いタレントで司会者の長谷川高文たかふみに笑いながら文句を言っていた。

父親の借金を背負う覚悟を決めたあの日。深雪は男が勤める芸能プロダクションに入社することが決まった。

借金を返すためならどんなことだってやり遂げてみせる。

その覚悟の下、彼女はゴキブリが大量発生した部屋でカラオケ100点を取るまで部屋から出られない。幽霊が出る洋館に一人で潜入。世界一高いバンジージャンプを行うなど、芸能事務所側がNGを出すケースでも率先して行った。

穢れを知らなそうな美少女が率先して身体を張った仕事を行う。彼女の容姿とその仕事に対する姿勢に、我妻深雪は芸能界で確立した地位を築き上げていった。

「も〜いやー!」

笑いながら文句を言う深雪を、彼女のマネージャーになった大男は呟いた。

「深雪ちゃん。お金が稼げておいしい思いができる、素晴らしい仕事だっただろ」

穢けがれのない手つかずの花のような彼女が白いローションにまみれる姿は、彼女を穢けがれたいという欲望にまみれた男を満足させるものだった。

「綺麗だ。とても綺麗だよ、深雪ちゃん……」

大男はうつとりとしながら見つめていた。

その後。可愛い系リアクション芸人の先駆者として芸能界で一目置かれる存在になった彼女は無事家を買戻し、自分を捨てて逃げた父親を許し、リアクション芸人としての道を歩むのであった。

## 女スパイ・屈辱的拷問

薄暗い地下牢。

闇に溶け込みそうなほど黒々しいスーツを着た女性が鎖でつながれていた。

「ハア！ハア！ハツ、ハツ……」

数々の拷問に耐え、肩で息をするたびに繋がれた鎖がジャラツと耳障りな音を立てる。整った美しい顔は疲れて暗く沈んでいる。

彼女の名はジェニユイン・バスターバイン。

絹糸のように艶やかな金髪を背中まで伸ばした女スパイ。白人特有の抜けるように白い肌は数々の拷問を受けたのにもかかわらず依然としてその白さを保っていた。

スーツの上からでも分かる豊かな胸だが、胸元が大きく開けられているため、彼女の適度な硬さと柔らかさを兼ね備えた美巨乳が大きく震えるのが手に取るように分かる。じつとりと汗ばんでいる艶めかしい乳肌。彼女の体の動きに合わせてぶるんと震える双乳。

（耐える、耐えるのよ、ジェニファア。耐えれば必ず応援が来る！）

そう言つて彼女は自分を鼓舞し続ける。

「くくく。こきげんいかな、某国の諜報員のジェニユイン・バスターバインさん」  
顔を上げるとそこにはでっぷりとした白衣の男が立っていた。

たなかうみいちろう  
田中海一郎 日本で急激にシェアを拡大させた田中製薬会社の研究員で、田中製薬会長の孫だった。

男は目の前の痛みに耐える抜群のプロポーションを持つ女性にいやらしい視線をそそぐ。

「こう言つてはなんです、あの拷問に耐えるとはなかなかのものだ。それでこそおとしがいがあるというもの」

ペロツと唇を舐める男に、金髪の女性は嫌悪感をさらに強くする。

「フンツ、私はアンタの拷問には絶対に屈しない！ いずれ仲間がこの場所を探し出す。アンタの命もそこまでよ!!」

「ほう、怖い怖い」

男は両手を上げて大げさに言う。

「じゃあ、そのお仲間が来る前に。せいぜい楽しませてもらいましょうか」

いやらしい下品な笑みを浮かべながら笑う男に、麗しき金髪の女スパイ、ジェニユイン・バスターバインは、拒否権のない拷問への抵抗に睨みつけるしかなかった。

それがムダだと分かっている。

10分後。

「アアツ、アア!?……い、痛いイ……!!」

拷問部屋に連れて行かれた女スパイの嬌声が部屋に響いていた。彼女の両手は天井の滑車に吊るされている。

「うううつ、痛い……痛いっ!アアアンツ!!」

それでも彼女は耐える。

仲間が必ず助けに来る。

そう信じて。

「ふふっ。なかなかのものですねえ」

いやらしい笑みを浮かべながら男は目の前で苦痛に耐える女スパイを見る。

「敵ながらよく耐えるものです。……その足ツボマットに」

「ううう、ウウウツ!あああ……ツ!!」

女スパイの足元には足裏を刺激するいくつもの突起がこれでもかと敷き詰められていた。

田中製薬に捕らえられたジェニユインはこうして毎日一時間以上もこの足裏マットを歩かされるといふ苦渋の拷問を強いられていた。

「ふふっ、それが終わったら次は高性能全身マッサージチェアに座ってもらおう！言いたいことがあるならば何でも言うがいい。もつともスパイの君に拒否権はないがね！フフフッ、フハハハハハハッ!!」

こうして仲間が助けてくるまでの間、魅惑の女スパイ、ジェニユイン・バスターバインは田中海一郎という俗悪な研究者の実験と言う名の拷問を受けるのであった。

## 女スパイ・屈辱的拷問後日談

田中製薬会社のVIP専用応対室。

「お待ちしておりました。最上様」

薄暗い部屋に杖をつく老人が入室する。政界にも大きな影響を与えるVIPを、田中製薬会社会長の孫に当たる腹の出た三枚目研究員の田中海一郎が出迎えた。

「海一郎くん。商品は出来ましたかね」

枯れ木のようなヨボヨボの身体をしながら目だけはギラギラと獲物を狙うような猛獣のような光を放つ老人が、目の前の醜悪な男に尋ねる。

「ええ。最上様が多額の融資をしてくださるおかげで。今回の新作は前回以上に最上様を満足する品かと」

「ふふつ、聞いているよ。会社に某国の女諜報員が潜入してきたとか」

極秘中の極秘の情報を目の前の老人が知っていたことに、研究者は少しだけ驚いた。

「さすが最上様。そんなことまで知っておられるとは」

そうやって男は異性が見たら逃げ出しそうな醜悪な笑みを浮かべる。

「最上様のおっしゃるとおりです。ちょうど良い所に極上の実験体がきまして。おかげ

で今回のような商品が出来ました。まあ、やりすぎて使い物にならなくなりましたが」

「いやあ、海一郎くん。やりすぎはよくないものだよ!」

「ええ、まったくです!」

ハハハッ!と二人は聞くに堪えられない下品な高笑いをする。もしこの場に女性が  
いれば逃げ出すか嫌悪感を抑えられずにはいられなかっただろう。しかしバスケット  
コートほどある部屋にあるのは、隅に置かれた布が被せられた人一人入れるだろうガラ  
スケースと豪華な調度品があるだけ。二人の笑い声を咎める人間はいない。

「それじゃあ、海一郎くん。さっそく商品を紹介してくれたまえ!」

よだれを垂らす勢いで老人は研究員を促す。その姿は欲情する極上の女に誘われた  
寸前のもうでもあつた。

「まあまあ、最上様。商品は逃げたりはしませんよ」

そう言いながら研究員も自身が手がけた商品を紹介したくてウズウズしているのだ  
ろう。ただでさえ醜悪な顔をさらに醜く歪ませながら、部屋の隅に置かれた布が被せら  
れたガラスケースをチラチラと見ていた。そして被せられた布に手をかける。

「では最上様。これがこの田中海一郎が作り出した商品でございます!」

そう言つて男は布を思い切り引つ張つた。

「おおおっ!これは!」



目の前の現れた商品に老人は世界一の美女と付き合えることになった性を知らない少年のような感嘆の声を上げた。

「どうでしょう、最上様。この海一郎が開発しました……全身マッサージチェアは！」  
「素晴らしい！素晴らしいよ、海一郎くん!!」

人一人入れそうな巨大なガラスケースに入れられた黒く艶やかな光を放つマッサージチェアに、老人は目を輝かせる。

「どうですか？このマッサージチェアは！この見る者全てを虜にしそうな艶やかな光沢ある黒。もちろん見た目だけではございません！360度回転するもみ玉がより滑らかな動きを実現し、背筋のカーブにフィットした構造、さらに細かくコリをほぐしてもらいたい所をしてもらえる部分調節機能！そしてよりプロの手技に近づけた機械の動き！おかげでコリの塊だった女スパイの身体が解れてしまい、マッサージチェアを試すことが出来なくなるほんです」

「そんな御託はいい！さっさと使わせてくれ!!」

老人の願いに男はマッサージチェアをガラスケースから取り出す。

喉から手が出るほど望んだマッサージチェアに座った老人は、天にも昇るような朗らかな笑みを浮かべた。

## 天涯孤独の少女は父の親友に徹底的に調教される

「うう、ゲホゲホ……」

薄暗い病室のベッドに枯れ木のようにやせ細った男が大きく咳き込んでいた。真っ白な布団に赤い斑点が飛び散っている。

「九頭本くずもと。お前に……俺の一人娘……桃ももを、頼む」

「ハア？……お前何を言ってるんだ？」

今にも目の前で死にそうな男の願いを鼻で笑う。

「お前は『桃が嫁にいくまで死ねねえな。あいつを嫁にいくまで成長させるのが弱い身体なのに桃を生んでくれたひな子あいつに対するせめてもの礼だ』って言っていただろう。死ぬならあと10年は生きるんだな。そしたら結婚できる16歳になるから」

「ゲホッゲホッ！そ、そうしたい……んだが、もう、俺は……」  
無理だ。

紙のように白い肌と30代前半にもかかわらず二回りほど老け込んだ顔つきが、自分がかつて言っていた宣言を果たせないことを物語っていた。

「……」

今日明日にも死にそんな親友に男は言い放つ。

「おい、久木。お前が死んだらお前の娘は引き取ってやる。保障はしないがな」

意味深な笑みを浮かべる男に、ベッドに横たわる男は心残りのない清々しい笑みを浮かべた。

死を目の前にした親友を最後まで笑った九頭本健吾くずもとけんごが病室を後にしたその日、久木耕平こうへいは他界した。

その死に顔は天涯孤独になる一人娘がいるにもかかわらず一点の不安や心残りのない、心穏やかな物だった。

そして久木耕平の一人娘、久木桃は自分の父親を最後まで笑っていた男に引き取られることになる。

この日を境に久木桃の人生は男の望む女になるように調教される人生を歩まされることとなる。

男の家に連れてこられた少女は朝昼晩食事を食べたら歯磨き、家から帰ったら手洗いうがいをするように強要された。

一人で遠くに外出することは許されず、友達と出かける場合でも午後5時という門限

を設け束縛した。門限を過ぎたのにもかかわらず連絡一つしなかった時は事情を聞いた上とはいえ晩御飯抜きという拷問を加えられたこともあった。

中学校に上がる年頃になると自分の部屋を与える代わりに「自分のことは自分で出来るようにしろ!!」とこれまで男がやっていた家事を強要された。

さらに男は自分が楽になるように「これで今日の晩御飯を買ってこい! お前のお菓子は2000円以下だ!」と一人で買い物を行かせるようになった。

物心つく頃には反抗する少女に罵声を浴びせるようになった。

「なんで九頭本さんをお父さんと呼んじやあいけないんですか!!」

「バカか、お前は!! お前の父親は久木耕平ただ一人だ!!」

長年にわたる男の徹底的な調教に高校生になる頃には少女は変わり果てていた。

成績は全国でもトップレベル、運動神経は運動部にひつきりなしに勧誘され、先輩や同級生・後輩に慕われ一年生で生徒会長に任命されるほどの才色兼備の女性に。

そして。遂に男の調教から解放される時が来る。

高校を卒業して地元の一流企業に就職し、そこで出会った男性と婚約するまでの仲に発展。結婚式をすると決めた一ヶ月前に自分を調教した男が倒れたのだ。

病院で診察を受けた結果はガン。それも胃や肺にも転移した末期の状態で余命は一ヶ月ほど。

偶然にも長年に渡り調教した男の病室は、父である久木耕平と同じ部屋だった。

「死なないで下さい！九頭本さん……せめて結婚式で『育ててくれてありがとう、お父さん』って言わせてから死んで下さい。お父さん!!」

「……ば、バカだろ。……お前の、ちち、おや……は、ひさ、ぎ……こうへい……ただ、一人……」

素晴らしい残し、少女を長年に渡り調教した男は、滝のように涙を流す、一人前の女性に成長した少女の前で息を引き取った。

その目には一筋の涙がこぼれていた。

長年に渡る調教から解き放たれた少女は男が残していた遺書に従って、予定通り一カ月後に結婚式を挙げ二人の子どもを産んで未永く幸せに暮らした。

家の仏壇には彼女の産みの親である両親と、何故か自分を結婚するまで調教し続けた男の遺影があった。

## 催眠女子高生・夢宮綾芽～改造サレテイク肉体～

(私って何でこんなに身体弱いんだろう)

自分の席で人形のように可愛らしい顔を眠たそうにさせた身体の細い女子高生が机にうつ伏せになって呟いた。肩まである緩やかなウェーブを描く黒髪。小学生にも見える低身長がなおのこと彼女を可愛らしい印象を与える。

夢宮綾芽。運動経験まったくなしの帰宅部だった。

「やっぱり身体鍛えないといけないかなあ。でも鍛えるのって面倒なのよね」

「それならいい方法教えようか?」

「え?」

綾芽が振り向くとそこには一人の男子生徒がいた。

クラスメイトの鈴木直太郎。すずきなおたろう

クラスメイトなので顔と名前が一致しているだけで話した事はほとんどない相手だった。

「……ふくん、じゃあ教えてよ」

にもかかわらず彼女は少し考えた後、その方法を尋ねた。普段話さない相手がどのよ

うな方法を教えてくれるか興味があったからだ。

その後綾芽は次の休日、自宅でその方法を取り付ける約束をした。

この判断が彼女の道を踏み外すことになるうとは、この時の彼女は気づいていなかった。

|||||

土曜日。

「で、方法は何？」

自室に招いた綾芽は直太郎に尋ねた。

年頃の男女が二人きりになるのだ。突然目の前のクラスメイトが襲い掛かることも考え一階には両親がいる。もし叫び声をあげればすぐにやってくる。

目の前のクラスメイトが強姦するという危険は限りなくゼロになった状況だ。

「それはですね……」

そう言って直太郎は持っていたスマートフォンを彼女の前に出した。

「身体を鍛えないといけないね。そう運動をしてね」

「まあ、運動をするのは当たり前よ、ね……」

この時、瞳から光が失いつつあった彼女は気がつかなかつた。目の前の男の術中にはまっていたことに。

「もう綾芽は僕の声しか聞こえない」

そう言つて直太郎は指をパチンと鳴らす。

瞬間、カクンと操り糸が切れたかの様に頭を落とす。そんな少女の頭に直太郎が手を伸ばす。

「さあ、ボクの手を意識して下さい。僕の手が触れている部分から、あなたの方へと力が流れ込んでいきます。ほら、どんどん何も考えられなくなっていく。何も考えられないのが気持ちいい」

「あ……あ……あ……あ……あ……」

表情が段々と緩み、すつとまぶたが落ちようとしていた。

そんな彼女を見て直太郎は邪悪な笑みを浮かべながら頭をゆつくりと揺らしていく。

「……」

その動きに逆らうことなく、綾芽は揺られ続ける。

「とても気持ちいい。何も考えることが出来ない。もう僕の言葉以外は何も聞こえない。僕の言葉に従うことはとても幸せで気持ちいいことです。あなた方の幸せは僕に従うこと。それはとっても気持ちいい。さあ、立つて。僕に付いてきて下さい」

「……従うことは……気持ちいい……」

虚ろな目で答える綾芽。



「それじゃあ……」

ニヤリと笑みを浮かべた直太郎は虚弱体質の女子高生の耳元で囁いた。

|||||

「ああ……ううん、あああ！」

体操服に着替えた綾芽の嬌声が木霊する。

「ほらほら、こんなのでへこたれてはだめだよ。もつと足を広げて！」

「あ、はい……」

顔を赤く染め、綾芽は言われた通り足を広げる。

「そうだ。それじゃあ、いくよ」

「い、痛いー！」

突然の激痛に涙を浮かべる。そんな彼女を見て直太郎が慌てふためく。

「ごめん、いきなりグツとやるのはダメだったね。……柔軟体操は」

「あああ！い、痛いよお！」

開脚をしている綾芽が筋が伸びる痛みに悲鳴を上げた。

「まず身体を柔らかくしないと怪我をしやすくなるからね。あと柔軟には身体を温かくする効果がある。それから軽いトレーニングで身体を鍛えていこう。そう身体を鍛えることは楽しいことだよ」

身体を鍛えることは楽しい。

そう擦りこまれた少女は変わってしまった。わずかな時間を見つけてはストレッチや今の自分にあつた筋トレを自主的に行い、バランスのとれた食事、適度な睡眠、規則正しい睡眠を心掛けるようになった。

「身体を鍛えることは楽しい」と洗脳された少女は次第に懸垂けんすいや匍匐前進ほふく、トライアスロンなどのハードなトレーニングに手を染めてしまい、ついには砲丸投げや短距離走など女子高校生が持つ日本記録を塗り替えるまでに身体を鍛えあげてしまった。

「ああ、鍛えたい。もっと私の身体、鍛え上げたいわ」  
身体を鍛えることは楽しい。

そう洗脳された虚弱体質だった少女がムキムキのマッチョになるのに時間はかからなかった。

敗北の姫騎士マリアンヌは平民に落とされた王女の行方

（

中世。

小国クライン王国は大国サリウス帝国の度重なる侵略に耐えていた。

クライン王国は小国ながら長年度重なる他国の侵略から独立を保ってきた国だった。それゆえに優秀な将と勇猛果敢な兵。そして高い士気を持っていた。

しかしそんなクライン王国といえど、休む間もなく攻め続けるサリウス帝国の圧倒的な物量には勝てず、ついに首都を明け渡すこととなった。

そして、この日。前線で剣を振るい、その強さと美貌から『クラインの至宝』と呼ばれたクライン王国の第一王女マリアンヌ・クラインの裁判が行われようとしていた。

|||||

サリウス帝国裁判所。

「判決を言い渡します。主文……」

裁判長の厳粛な声が法廷に響く。

被告人席には毅然とした態度で立つ金髪の女性がいた。現在彼女は愛用の武器を全

て没収され粗末な衣服を着せられているが、身体からにじみ出る高貴なオーラは幾分も失われてはいない。

マリアンヌ・クライン。

クライン王国の第一王女でありながら、幼い頃から剣や戦術を学びサリウス帝国の侵略を防いだ英雄。切れ長で大きなグリーンの瞳を優しげに輝かせ、細眉の間から嶋の通った高い鼻を中央に飾り、東洋の国に咲く桜のように色づく、小さくて形のいい唇。さざ波のようにウェーブする光り輝く金色の髪は裁判にかけられている者のものとは思えないほど、彼女の美しい顔と同じく見る者の心を奪う要素であり続けていた。

心を奪う要素は顔だけではなかった。

数々の激戦で戦ってきたとは思えないほど、鎧を奪われた彼女の身体は息をのむほどのスタイルだった。

ほどよく豊かに膨らんだバストは、女性として魅力的なラインを描いている。下半身に目を移せば、粗末なスカートからは想像も出来ないほど健康的な太股が現れ、見る者の目を奪ってしまふ眩しさがあつた。それでいてお尻は胸と対照的にきゅつと引き締まっている。訓練によって培われた程よい筋肉と、女性としての魅力を最大限に引き出す肉感の絶妙のバランス。

類稀なる剣の才能を持ち戦場で戦つていても女性らしさを失っていないどころかそ

の美しさが磨かれた10代後半の若き王女は、今にも爆発しそうな感情を抑えて前を向いて座っていた。

「……被告、クライン王国第一王女、マリアンヌ・クラインはサリウス帝国に対する度重なるテロ、ならびにサリウス・クライン両国民を大量に殺させるよう仕向け、社会秩序に対する重大な影響を与えた。よって思想矯正の執行処分とする！」

「テロ?……国民を殺させるように仕向けた?ふざけるな!!」

抗議の叫びを上げて被告人席から思わず立ち上がったマリアンヌ。だが。

「静かにしろー」、「おとなしくするんだー」、「黙れ、犯罪者！」

激昂する王女は傍に立っていた廷吏ていりによって無理やり座らされる。

それでも彼女は訴え続ける。

「敵とはいえ、これが……これが国と国民を想い必死で剣を振るってきた騎士に対する事か!? 貴様らに弱き者を助ける精神があるのなら、このような判決はしないはずだ!!」

王女の身でありながら愛する国民のために戦ってきたマリアンヌは、自分が行ってきたことを罪であると言われることが我慢できなかつた。

だが、そんな彼女の訴えに耳を傾ける者は一人もない。

「おかしいのはお前のほうだ!」、「判決に従え!」、「場所をわきまえんか! この殺戮者さつりくしゃ

!」

腕や肩を掴まれ、ズルズルと引きずられるようにして退廷させられる。

「間違っている……こんな判決、絶対に間違っている!!」

どんなに叫ぼうと彼女の訴えは届くことは無い。なぜならばこの裁判は『マリアンヌを犯罪者にしたてあげる裁判』なのだから。

それは彼女にもわかっていて。だが叫ばずにはいられなかった。

彼女の悲痛な叫びは裁判所の廊下に虚しくこだまするのみだった。

|||||

裁判が終わるとすぐに睡眠薬を無理やり飲まされ意識を失ったマリアンヌが再び目覚めたのは陰湿な地下牢。

彼女の前に現れたのは一人の男。その男を王女は知っている。

「貴様は、サリウス帝国の王子、ラウンゼル!」

ボサボサの髪に適当に剃った髭。野獣が一流の衣装を身に纏っただけの気品のかけらもない男に、マリアンヌは氣勢を上げる。さらりと波打つ長髪の下に凛々しくも鋭い眼差しを灯した王女は、こんな状況であつても毅然とした態度で男を見据える。

「久しぶりだな。マリアンヌ王女。こうして話すのも先日平和協定以来か?」

まるで偶然道で出会った仕事仲間に語りかけるような口調。その場違いな口調に王女はキツと睨み付ける。

「その平和協定を破った卑怯者が、私に話しかけるな！」

そんな王女に薄気味悪い笑みを浮かべる。

「いいことを教えてやるぜ。てめえはいずれその卑怯者よりも更に下の男達の足下に跪くことになる。てめえの意志でな」

「戯れ言を……！」

ラウンゼルは自分を睨みつける少女の下あごを持ち上げる。

「時が来れば分かる。てめえの本当の姿が、な」

「……ッ！」

男の欲望に塗れた醜悪な笑みに、地下牢に入れられた元王女はキイツと睨み付けた。

どんなことをされてもお前の思い通りにされない。その意志を込めて。

だがこの時、クラインの至宝と呼ばれ美と剣技を兼ね備えた元王女は知らなかった。

目の前の憎悪の対象でしかない男の予言通りになることを。

||||||||||||||||||||

数ヶ月後。

過激な服装の女性達が集う城下街の一角に、クライン王国の王女だったマリアンヌ・

クラインはいた。

「それじゃあ頼むぜ」

「はい、かしこまりました」

みすばらしい服を着せられているものの、王女の頃の美しさを保ち続けているマリアンヌは媚びた笑みを浮かべながら汚らしい男の足元にひざまず跪いた。

その動きはそうするのが当たり前のように自然であった。数か月前の彼女なら跪くどころか愛用の剣で真つ二つにしていた。そんな彼女が今では何かを期待した顔で自ら進んで男の足元に膝をつく。

「それでは……失礼いたします」

マリアンヌはポケットから汚れ一つない真つ白い布を適度に濡らし

キユキユキュツ

と泥まみれの男の靴を磨いていく。

「どうでしょうか?」

「いいぜえ、流石はサリウスいち一の靴磨き職人だあ」

少し不安げに尋ねるマリアンヌに男は清々しい笑みで答えた。

「あ、ありがとうございます!」

その一言にマリアンヌは飼い主に褒められた犬のような笑みを浮かべた。

王女から平民に落とされたマリアンヌは城下街の一角にある靴磨きの店に連れて行かれた。



最初は汚らしい靴を綺麗にするのを嫌がっていた彼女ではあったが、ものすごく汚かった靴がピカピカになる姿と客の嬉しそうな笑顔を見るたびに靴を磨くのが楽しくなっていた。

「お、おい！綺麗にしてもらったんならさっさとどけよ！」、「まだ待っている奴がいるんだぞ！」、「お、俺も（靴を磨いてもらって）気持ちよくなって明日の仕事に出たいんだよ！」

マリアンヌに靴を磨いてもらおうと、後ろで待っていた男達が磨いてもらった男に怒りの声を上げる。

マリアンヌは後ろで待つ客をなだめ、先ほど磨いた客に御礼の挨拶をすると次の男の靴を磨く準備に取り掛かった。

元クライン王国第一王女、マリアンヌ・クラインの顔に民の上に立つ王女としての気品や民を守ると言う騎士としての誇りは消え失せていた。あるのは靴を綺麗にして客に喜んでもらいたいと言う靴磨き職人としての喜び。それだけだった。

『奥さん、貸した金が払えないなら身体で払ってもらおうか!』のぶっちゃけ

『奥さん、貸した金が払えないなら身体で払ってもらおうか!』を書こうと思ったきつかけは、何か面白い話を書きたいと考えた時によしもと新喜劇のネタで女性役が多い桑原くわばら和男氏かずおが悪徳議員役で

「(秘書の名前)ちゃんの弱いところついちゃうぞ……五目並べ」

みんなツコツ!というシーンを思い出したから。

多くの人がR18だと思ったという感想を書かれています。『女スパイ・屈辱的拷問』と敗北の姫騎士マリアンヌ〜平民に落とされた王女の行方〜』はキルタイムコミュニケーション(多くの官能小説を出版している会社)に投稿しようとしていた作品、つまり本当にR18を書こうとしていた。

ではなぜR18ではないかというと、筆先文十郎に官能小説を書くそれだけの力量がなかったから。もし筆先文十郎に才能があったら上記二つは官能小説になっていた可能性が高かった。

『お嬢ちゃん、今何でもするって言ったよな?』と『女スパイ・屈辱的拷問後日談』は感

想を下さった方の意見を元に作成したもの。

『お嬢ちゃん、今何でもするって言ったよな？』に登場した司会者、はせがわたかふみ長谷川高文の名前の由来は島田紳助氏の本名と明石家さんま氏の本名を組み合わせたもの。

『天涯孤独の少女は父の親友に徹底的に調教される』の元ネタは源氏物語のひかるげんじ光源氏とわかむらさき若紫。

高校生の時に源氏物語を学んだ時に光源氏が若紫を理想の女性に育てようと考えたシーンを見た時『これ調教じゃん』と思ったから。

『催眠女子高生・夢宮綾芽く改造サレテイク肉体く』は本当は催眠高校生・鈴木直太郎に投稿しようと考えていた作品だった。

では何故こうなってしまったかというところ、筋トレとかしたら筋肉がつく↓ムキムキマッチョが頭から離れなくなってしまうから汗。

奥さん、貸した金が払えないなら身体で払ってもらおうか！は一話限りで終わる予定だった。理由は続きが書けないから。

ではなぜ続きを書いたかと言うと読者の皆様の感想にネタになることが書かれていたから。

この場を借りてお礼申し上げます。

筆先文十郎は『天才・くろつち涅マユリの秘密道具』という小説を書いているのですが、そ

れに迫る勢いでこの小説が見られていることに滅茶苦茶驚いている。

前職の親友に

『奥さん、貸した金が払えないなら身体で払ってもらおうか!というコレジャナイ小説を読んでくれないか?』

とメールでお願いしたら

『18禁は読まん!』と返ってきた。(後に電話でこれは18禁じゃないと説明したことで誤解は解けた)

## 夜。汚れなき花は散る

「い、いや……やめてください……」

人気のない公園で、一人の少女が数人の男達に取り囲まれていた。

うのはなまゆり  
卯ノ花繭梨。

県内でも有名な 女子校に通う生徒である。整った眉に控えめな鼻筋、長いまつ毛によつて縁どられたぱっちりとした瞳。少し幼さを残した輪郭。

小柄な身長に反して一般女性の平均を超える乳房。細く引き締まった腰回り。適度に張った臀部。才色兼備の非の打ち所がない模範となる優等生。

彼女はそんな自分が嫌だった。

自分の好きなように振舞うことが出来ず、親の望む通りに生きている自分が。一度ぐらい自分の思い通りに。

せめてもの反抗心が強姦が現れるというよりに来る公園だった。

スリリングな体験を試みたい。どうせ自分を襲われないのだから。

そして彼女は後悔した。

彼女がどんなに暴れても男たちが四肢を抑えている以上彼女が動くことはできない

ましてや 男たちも彼女よりも体格がいい。運動神経がさほど良いとは言えない彼女が抵抗すること自体が無駄であつた。

「やめ、止めて下さい！」

無理やりキスをしようとする男に少女は反射的に顔を背ける。それでもキスをしようとする男にもがき続ける繭梨が偶然にも男の頭に頭突きするようにぶつかつてしまった。

「何すんだ、このアマが！」

「い、痛い！」

頬を叩く音が周辺に響く。

初めて味わう暴力が彼女の抵抗する意識をなくさせる。

「さてご開帳と行くか」

その言葉に少女は血の気が引いた顔を小さく左右に振る。

「い、いやあ……」

今まさに食われようとする子羊を、よだれを垂らしながら一人の男が服に手をかける。

その時だつた。

「いんげんは」

不意に聞こえた謎の声に男たちはバツと振り向く。そこには時代劇でしか見ない黒い和服を着た、150センチ前後しかない繭梨も小さい男が立っていた。腰には刀が差してある。

「なんだテメーは?」

目の前に立つ謎の男が小さくことに男たちは気づいていなかったが、一目見た瞬間彼女は強姦たちよりもそういうの男の方が強さを感じた。

否、恐怖心を覚えた。

突然現れた男の姿を見た瞬間彼女は恐怖で息を呑んだ。男の身長は145センチ前後。繭梨よりも小柄だ。しかし体から滲み出すオーラがその男がただものではないということを知らしめていた。

「死神……」

少女は自分でも気づかぬまま少年のような男をそのように言った。

「ああん!何だ、てめえはよ!!」

せつかくのごちそうを横取りされたライオンのように怒り狂った男たち。

「死ねや、オラア!!」

そう言った謎の男に襲い掛かった不良をきっかけに仲間が続く。しかし少年のような男は前後左右からの攻撃を容易く避ける。

まるで普段は理知的に振舞っているが、その本性は残忍な性格をしたマッドサイエンティストで、倫理観の歯止めが利かない研究や人体実験を好む強い好奇心の上司から逃げ惑っている自分には欠伸あくびが出ると言わんばかりに。

その後男達がどんな攻撃をしようとも繭梨が死神と言った男は服にすらかすらせることなく攻撃を避け続けた。

「ハア……ハア……な、なんで攻撃が当たらねえ……」

肩で息をする男達を見ながら小柄な男は呟く。

「本来なら殺してやりたいところだが……霊法で指定以外の人間を殺してはいけなからな。これだけで勘弁してやるとするか」

意味不明なことを呟いた小柄な男は左足を少し下げ持っていた刀に手をかけた。

シヤキンツ！

男がいつの間にか抜いていた刀を鞘に納めた。次の瞬間。

パラパラパラツ……

男達が持っていたナイフなどの武器がまるで包丁で切られたバナナのようにポトポトと地面に落ちた。

「次は首をもらうぞ」

男が静かに笑う。その姿に男達は初めて気がつく。自分達があんまりでもないバケモノ





「いやあああああああああつっつ!!」

パラッ……

少女の悲痛な叫びとともに近くに咲いていた白い花がぱらりと散った。

「無理に引つ張ったから余計に破れてしまったじゃないか。貴女が裁縫道具を持っていないことはとつくにお見通しだったんですよ」

謎の男は裁縫道具を取り出し彼女の破れた制服を縫っていた。

「あ、あの……どうして私の服を？」

「破れた服でウロウロするつもりですか？……たく、本当は忙しくてこんなことをしている暇はないんだけど」

そう言つて男はあつという間に制服を縫い合わせた。

「いいですか。これからは危ない道は 進んで入らないことですよ」

「は、はい」

(そうだ、お礼を言わないと。何だかんだ言つて私を助けてくれたんだし)

男に背を向けて歩き出そうとしていた繭梨は振り向く。しかし先ほどまでいた男はいなくなっていた。

まるで魂を回収という仕事を終えた死神のように。

## 女スパイ・屈辱的拷問2～白濁陥落～

田中製薬会社。

日本では知る者はいないと言われる国内で急激にシエアを拡大させた製薬会社である。その一方で秘密裏に人体実験などを行い様々な所と繋がっているという情報も絶えない。

その詳細を調べるため某国は一人のスパイを送り込んだ。しかし送り込んだスパイから連絡が途絶えた。

事態を重く捉えた某国の上層部は新たなスパイを送り込んだ。

「先輩、今助けに行きます。待っていてください！」

狭い天井通路を慎重に進みながら少女のような小柄な女性は小さく、それでいて力強く呟いた。

彼女の名前はリンダ・シエル。某国の女スパイだ。

子どものような愛らしく幼い顔立ちと平均的な成人男性の胸辺りしかない身長。長く艶やかなショートヘアが幼い顔立ちをより強調させている。

身長に反して胸元は程よく膨らみ、体型がはつきりと出ている漆黒のライダーズーツを魅力的にもちあげている。やせすぎず太すぎないくびれに、ほどほどに盛り上がったヒップライン。女性らしさと子ども可愛い可愛らしさと相反しそうな要素を見事に融合させた女性だった。

彼女の脳裏に一人の女性が映し出される。

ジェニユイン・バスターバイン。

某国の女スパイでありリンダの一つ上の先輩にあたる。ジェニユインはリンダを実の妹のように可愛がった。仕事のミスをしても励ましどころが悪かったのか一緒に考えにくれる、リンダにとつて姉のような存在だった。

一刻も早く会いたい気持ちを抑え、リンダはある部屋の前に立つと予め盗んでおいたカードキーを通す。ジェニユイン・バスターバイン

ガチャツ

重々しい扉がゆつくりと開く。リンダは周囲にセンサーやトラップなどがなく、確認しながら薄暗い部屋へと入っていく。

ウインウインウインツ……………ウインウインウインツ……………ウインウインウインツ……………

卑猥さを感じる小刻みに震える音がリンダの耳に届く。その音を頼りにゆつくり奥

へと進む。

「!?」

リンダは声が出そうになるのを慌てて口を抑えながら、目を大きく見開いた。

そこには鉄格子の中でバンザイをするように鎖でつながれ、目隠しと猿轡をされた金髪の女性、ジェニユイン・バスターバインがいたからだ。

先ほどの振動音が聞こえるたびに尊敬する先輩の体がビクンツ!と震える。

「先輩!私です、リンダ・シエルです!今助けます!!」

リンダはすぐさま鉄格子の鍵を破壊すると振動音が聞こえるたびにうめき声を上げる先輩に近づく。

「先輩!大丈夫ですか!?!」

「リンダ!今すぐ逃げ——」

リンダが猿轡を外すとジェニユインは何かを言おうとした。しかし彼女がその言葉を最後まで言うことは出来なかった。

ガシャンツ!!ブシューーーツツツ!!

鉄格子にシャッターが下り、天井のスプリンクラーから真っ白なガスがあつという間に逃げ場のない部屋に満ちていく。

「う、ゲホゲホツ……!?!」

ガスを吸った瞬間、全身の力が抜けてリンダは糸が切れた人形のように床に崩れ落ちる。「せ、せん……ぱ……………い……………」

わずかに残った力を振り絞って少女のような女性は愛する先輩の方へ手を伸ばし、力尽きた。

「んっ」

リンダはゆっくりと目を開ける。一瞬何が起こったのか分からない。どういうわけか体が動かなかった。辺りを見回すと先ほどの部屋と同じ薄暗い部屋だった。

(でも先輩がいないということとは……別の部屋みたいね)

彼女は自分が置かれている状況に気付き自虐的に笑う。

自分もジェニユイン・バスターバインと同じように敵の手に落ちたことを。バンザイをするように両腕を上げた状態で拘束されていることが彼女に絶望と不安をより強調させる。更に言えば足首も固定されて身動きが取れない。

何とかして手首の縄を解こうとしたが特殊な訓練を受けた彼女をもつてしても切れる気配はない。自分のような専門的な者に用意された縄なのだ。リンダは理解する。

無様だな……

じわじわと悔しさがこみ上げてくる。愛する先輩を助けるために乗り込んだのに助

けるどころか自分も敵の手に落ちた自分が。

「お目覚めですかな」

声のした方へ振り返る。そこにはでっぶりとした白衣の男が立っていた。

「お前は、たなかうみいちろう田中海一郎！」

田中海一郎。田中製薬会社の研究員で、田中製薬会長の孫に当たる男だ。

「ほう、流石は某国の女諜報員様だ。先日我が社に潜入したジェニユイン・バスターバインさんに色々と僕が誰なのかご存知とは」

ニヤニヤと下品な笑みを浮かべながら話す男に、リンダはもうすでに自分が何者で何のために潜入したのか相手は知っているのだと悟った。

「殺すなら早く殺せ！先輩を救えなかった以上、私に生きる価値などないのだから！」

自嘲しながら言い放つリンダに男は意外な言葉を発する。

「殺す？何故殺さなければならぬのです？」

「え？」

予想外の返答に目を大きく見開くリンダ。そんな女スパイを見ながら男は続ける。

「殺すなんてもつたいたいことなどしませんよ。あなたには生まれ変わってもらいます。私の忠実な奴隷……いえ、実験体として」

「ど、奴隷だと……」



リンダの脳裏に先ほどのジェニユイン・バスターバインの姿が映る。姉のような先輩は目隠しと猿轡をつけられ、部屋が暗くて発生源がどこか分からなかったが怪しげな振動音をするものを付けられていた。それが何であるか少女のようなリンダでも知識としてあった。

「私に何をする気だ!?!」

「ふふふ、なあに。大したことはしませんよ。まだね」

恐怖を隠すように声を荒げる女諜報員に男は生理的嫌悪感を抱く満面の笑みを浮かべながらペットボトルを取り出す。

「な、何だ……それは?」

ペットボトルに入ったドロツとした謎の白い液体を見て、リンダは顔を引きつらせる。

「いえ、なあに。怪しいものではないですよ」

そう言いながらベロツと唇を舐める白衣の男。その気色の悪い光景を見てペットボトルの中身を怪しいものではないと思う女性はいないだろう。

男はペットボトルの蓋を開けると男は気持ち悪い笑みを浮かべながら近づいていく。

「や、やめろ!近づくな!!」

「ふふふ、そんなに怯えなくていいですよ。きっと気に入るはずですから」

そう言つてペットボトルを口につけさせようとすると男の思い通りになるまいと、リンダは顔を背け唇をキツ！と結ぶ。しかしそれはほんの数秒先送りにするだけだった。

「グエエッ！ゲホゲホッ！」

男の拳が女諜報員の腹にめり込む。いくら訓練を受けているリンダであっても両手両足が固定されている状態では攻撃を避けることも緩和することも出来ない。ましてやペットボトルに意識が向いていたためなおのことダメージを受けてしまう。

痛みで意識が一瞬失う。

その隙を見逃す男ではなかった。男はリンダの顎を上を持ち上げるとペットボトルの中身をリンダの口に流し込んだ。

「ウツ、ウグツ！ウウウツツ!!」

流れ込む白濁とした粘度の高い液体を吐き出そうとするリンダ。しかしいつの間にも手にしたのか喉に当てられたナイフを見た瞬間に、理解した。飲まなければこのナイフで喉元を切り裂かれると。

吐き出すという選択肢を消された彼女に残された唯一の方法は、得体の知らない不気味な液体を飲むということ。

「ウウ、ウツ……ゴクンッ」

涙を流しながらリンダは液体を呑み込む。

「あ、あれ?……これ……美味しい!」

初めて味わう味にリンダは感激の声を漏らす。その感想に男は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「それはそうでしょう。これは『飲む点滴』と言われ注目を集めている発酵飲料、甘酒。しかもより飲みやすく、より健康的になるよう僕が改良に改良を重ねた甘酒なのですから!」

「そんなことどうでもいいの!」

リンダは先ほどとは違う、懇願の涙を浮かべながら訴える。

「お願い!その白くてドロツとした液体、私に飲ませて!」

「ええ、いいですとも」

男がペットボトルを彼女の口に傾けると、女諜報員はゴクゴクと白濁の液体を嬉しそうに嚙下していく。

こうして愛する先輩を救うために田中製薬会社に乗り込んだ女諜報員、リンダ・シエルは白濁とした粘度の高い液体の前に堕ちていった。

一方。ジェニユイン・バスターバインが拘束されている部屋。

「あ、ああ……ああん!き、気持ちいい!気持ちいいのお!!」

後輩のリンダ・シエルが白濁とした液体の前に堕ちたことを知らない金髪でグラマラスな女諜報員、ジェニユイン・バスターバインは背中に付けられた肩周り専用のマッサージ器に恍惚とした表情を浮かべていた。

# 親父が隠していたAVを、俺は見る!!

夏休みが始まろうとするある日。

とある建築会社に勤めて40年。付き合い程度の酒しか飲まず、一日も遅刻も欠勤もしなかった真面目を絵に描いたような親父が死んで三か月目の朝のことだった。

「んっ。」

俺が本棚を雑巾がけしているとポチッと何かを押した音が聞こえた。次の瞬間  
プシュツッ!カタツ

空気が漏れる音と何かが開く音。振り返ると真っ白の壁が扉のように開いていた。  
「な、何だ!?!」

俺はゆつくりと扉となった壁を開ける。そこには一番上の棚の隅から一番下の棚の隅までびつちりと入れられたビデオが収められていた。ビデオに付けられた全てのラベルには『AV特集No.〇』と貼られていた。

「やっぱり親父も人の子だったんだな」

俺は嬉しさと怒りが入り混じった笑みを浮かべる。

俺の親父は厳格、そして禁欲の権化というべき存在だった。

『18にもなっていないお前が何でこんなものを持っている!!』

14の時に河原で拾ったエロ本が見つかった時にはこれでもかと病院に行く寸前でボコボコにされた。

おかげで性に興味を覚える年頃でありながら家に18禁物を置くことにトラウマを植え付けられた俺は、友達の家でエロ本やエロDVDを堪能してから布団の中で見た内容をオカズに自分を慰める生活を余儀なくされた。

俺にとつて親父はエロさえ絡まなければ勉強や進路の相談に乗ってくれる良い父親だった。

故に「あの親父もエロが好きなんだ」という安心感と「俺にはエロ本一つでトラウマ植え付けるほどボコリやがったくせに自分はこんなに大量のエロビデオ隠し持っていやがったのかよ!」という怒りがこみ上げる。

(でももう親父はいない。トラウマに関する怒りはこのエロビデオで水に流してやろう。さて問題は)

「どうやってこのビデオを見るか、だ」

俺は考える。

「DVDはおろかブルーレイの時代になった昨今、ビデオデッキを売っている所なんて見たことがないぞ。ということとはやはり……」

俺の脳裏にビデオデッキがある映像が浮かび上がる。そこは俺の家のリビング。

ビデオの時代が終わった今でも、俺の家のビデオデッキは主力として活躍し続けた。その理由は簡単だ。

俺はリビングに行く。そこには

「ああ、ソン様♥」

そこには一昔に流行<sup>はや</sup>った韓流ドラマを見る三段腹の母親と

「母さん。それが終わったら次私が戦隊物見るんだからね」

一昔の戦隊ヒーローシリーズのビデオを持った姉が居座っていた。

この二人が家にいる限り俺は安心してエロビデオを見ることは出来ない。

自分の部屋に帰った俺はあの二人をいかにして家から追い出すかを思案する。

「……よしー」

方法を思いついた俺はスマホを取り出し電話をかけた。

「あ、先輩。俺です。以前言っていたバイトの件なんですど——」

|||||

夏休み最終日の朝。

プルルルッ、プルルルッ、プルルルッ

「はいはいもしもし……あ、みつちゃん！久しぶりく、どうしたの？……え、ソン様主演の『夏のドナタ』の聖地観光ツアーの券が当たったから一緒に行かないかって？ええ!! ウソでしょ!……いや行く行く行く!!待って急いで準備するから!!」

「あ、母さん。もしかして『ソン様主演の『夏のドナタ』の聖地観光ツアーの券が当たったから一緒に行かないか』って友達から誘われたの？そんなこともあるかなって思ってた。パスポートや服、携帯、財布、トランク、デジカメなど旅に必要な物を用意しておいたよ」

タイミング良く階段から降りた俺はそう言って準備していた物を三段腹の母親に渡す。

「ああ準備がいいのね！ちようどよかったわ♪じゃあお母さん、みつちゃんと韓国で行われる三泊四日の『夏のドナタ 聖地観光ツアー』に行ってくるから後よろしくね!!」  
そう言うってお袋は急いで化粧と外出用の服に着替えると飛び出すように家を後にした。

「上手くいったな」

だれもいなくなつた廊下で俺は一人笑みを浮かべる。

お袋の友達から『夏のドナタ 聖地観光ツアー』に行かないかと誘われたのは偶然ではない。俺が仕組んだものだ。



エロビデオを見つけた俺は『今、バイト人がいなくて困ってんだよね』とぼやいていた先輩に電話をかけて夏休み限定のバイトを始めた。汗水たらして稼いだ金で『夏のドナタ 聖地観光ツアー』のチケットを買い、お袋の友達に『これでお袋を誘って行って下さい。あと俺が用意したことは秘密にして下さい』と頼んだのだ。

「よし、あとは姉一人」

お袋を家から追い出すことに成功した俺はある家に電話をかけた。

|||||

数分後。

「あ、はいはい……あれ優子? どうしたの? ……え? えええつ!? あのホームランもヒットも量産するけど日本記録を塗り替えるほどゲッツーも量産するプロ野球選手がヒーローとなつて悪と立ち向かう幻のアニメ『ゲッツー戦士アライダー』のDVDを手に入れたから優子の家で見ないかって? 行く行く! 行くに決まってるじゃん!! ……え? 『明日から学校なのに』『ゲッツー戦士アライダー』を全話見ると私の家で朝を迎えちゃうよ』つて。……バカねえ、優子。学校が怖くてアニオタやつてられますかって。……じゃあすぐに行くから!!」

「あれ、姉さん。どっか行くの?」

タイムニング良く俺は階段を下りて受話器を置く姉に話しかける。

「うん、私これから優子の家でアニメの勉強会するから。明日学校で会いましょう!」

そう言つて姉は制服と鞆一式、パジャマを持つて飛び出すように家を後にした。

「ふふ、上手くいったな」

誰もいなくなつた廊下で俺はニヤリと笑う。

お袋同様、姉が友達から『ゲッツー戦士アライダー』という超マイナーアニメを見ようと誘われたのは偶然ではない。

『夏のドナタ 聖地観光ツアー』のチケット代を稼ぐバイトを始めたのと並行して、俺は古本屋などで姉が見たくて見たくて仕方がない幻のアニメ『ゲッツー戦士アライダー』を探していた。

全国展開する大型の店から個人がやっている小さな店までバイトで疲れた体に鞭打つて探し続けた。探しに探して探しぬいた結果、俺はついに『ゲッツー戦士アライダー』を手に入れた。

ただし『ゲッツー戦士アライダー』はビデオ。姉の友達の家にはビデオデッキはない。そこで俺は学校の備品を使ってビデオからDVDに複製。姉の友達に『俺の家にDVD見れる機械がなくて、姉がこのアニメ見たがつていたので今夜見るように誘つてくれませんか?』とお願いしたので。

お袋は韓国。姉は友達の家でDVD観賞するため明日までいない。

「これで、これでエロビデオが見れる!!」

邪魔者がいなくなり俺は一人廊下で狂喜乱舞すると親父の部屋に直行、両手いっぱいビデオを抱えてリビングに飛び込んだ。

=====  
=====  
=====

「よ、よよよ、よ〜し……見るぞ、見るぞ、見ちゃうぞ……」

家でエロいものを見る。

そのトラウマに震えながら、俺はビデオをビデオデッキにセット、再生する。

『ニャー♪』

テレビには可愛らしい子猫がよちよちと歩く姿が映し出された。

「ああ、かわいいなあ」

愛らしい姿に俺は釘付けになる。その後俺は猫が気持ちよさそうに土鍋で寝ていた高いところに登って降りられなくなつて困り果てる猫の姿を見て心が癒された。

ビデオが終わったのか、カチツという音と共にテープが巻き戻される。

「ん?」

「この時俺はあることに気づく。

「あれ、このビデオ……」コマもエロシーンなかったぞ?」

気を取り直して俺は次のビデオをセツトする。

テレビに映ったのは足を骨折し動けなくなった主を助けるため村人を呼ぼうと猟犬が村へ助けを求めるドラマだった。

「うう、よかつた……よかつた……」

ボロボロになりながらも村人を引き連れ、主と共に村に帰ることが出来た犬に感動し涙する俺。エンドロールが流れ『完』という文字が表れた所で再びカチツという音と共にテープが巻き戻される。

「んん?」

俺は次のビデオを再生する。しかしいくら見てもビデオの中身は可愛い・感動する動物の映像が流れるだけでエロシーンは一秒もなかった。

昼から夜へと変わり次の日の朝を告げる朝日が昇り始めた頃、全てのビデオを見終えた俺は気づいた。

「これって。 アダルトビデオ A Vじゃなくて アニメビデオ A Vじゃん……」

こうしてチケット代を稼ぐためのバイトと幻のアニメの搜索に全てをかけた俺の高校生活最後の夏休みは動物動画を見て幕を閉じた。

# 悪魔の囁きに負けて……

「もう嫌だ……」

街灯のない夜道をヨレヨレのスーツを身に纏う男が月明かりを頼りに歩いていった。

会社では常に誰かに気を使い、サービス残業に、仕事のミスをなすりつけられる。思い通りにいかない、自分という人間が分からなくなる、そんなくぐもった生活を男は送っていた。

休日もクレームがあればすぐに対応しなければいけない。

一時も休まることがない、過大なストレスばかりの生活に男は絶望していた。

「もう何もかもどうでもいい。いつそのこと人でも殺してやろうかな……」

もし周りに人がいければ通報されかねないことを呟いた、その時だった。

ガサツ

無風の草むらに何かが動く音。

「な、なんだ？」

一瞬だけ驚いた男がスマートフォンライト機能で草むらを照らしながらゆっくりと進む。

そこには一人の少女が倒れていた。

「!?」

なんでこんなところに!?という一瞬驚いた男だがすぐに我を取戻し、少女を観察する。

着ている服は所々破れ、破れている箇所から青痣などが見える。背中まで伸びた黒髪は何日も洗髪していないのかポロポロで艶を無くしている。人形のように可愛らしい顔立ちも生気を失いマネキンのように見えた。

「ど、どうしよう?……そうだ、ここは救急車を——」

持っていたスマートフォンで電話をかけようとしたその時、頭の中で悪魔が囁いた。

——この女を家に連れて帰ろうぜ。

「な、何を言っているんだ……俺は?」

自分の声に自答する男は再びスマートフォンのボタンに手をかける。しかし

119

たった三回ボタンを押せばいいはずなのに指が動かない。

再び悪魔が囁く。

——いつ来るか分からない救急車を呼ぶより目と鼻の先にあるお前の家に連れて行った方が早いじゃないか。これも人助けのためだ。早くこの少女を家に連れて帰る

んだ。

「そ、そうだよな……これも人助けのためだ……」

悪魔の囁きに負けた男は、周囲を見渡し誰もいないことを確認してから震える手で少女を抱きかかえた。

|||||

3分後。

男は意識を失っている傷ついた少女をゆっくりと玄関に置いた。

「さてと」

じゅるりと舌舐めずりをして少女の服に手をかける。先ほど少女を助けようとした男とは思えない、欲望に塗れた邪悪な顔を浮かべながら。

「こんな少女を犯すなんて……ある意味背徳的な感じがするよな……」

このまま一気に服を破ろうとした、その時だった。

——待てよ。こんな意識のない奴を犯しても面白くないだろう？ここは起きるのを持とう。それとこんな生気のない状態で犯しても興ざめだ。飯をつくってやろう。

「そ、そうだな。確かにその通りだ」

悪魔の囁きに男は少女から離れる。

——とりあえずこのまま玄関に放置していたらこの少女が弱おんなちまう。ここは布団

に寝かしておこう。あとこいつは衰弱しているからおかゆみたいにスツと胃に入るものにしよう。

「なるほど。承知した」

悪魔の助言に従い、男は少女を布団に寝かすと台所に向かった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

その後。目を覚ました少女に男は「外は寒かっただろう？ おかゆを作ったから食べてよ」と促した。

状況を理解していない少女ではあったが、空腹だったのか男が出したおかゆをペロりと平らげた。

少しばかり元気を取り戻した少女は自分がなぜ倒れていたかを話した。

数ヶ月前に両親が死に叔父に引き取られたこと。叔父が自分を奴隷のようにこき使ってきたこと。自分に欲情し強姦しようとした叔父に暴行を受けながらも必死に抵抗。何とか逃げ出したこと。

そして頼るべき親類も友達もなく、力尽きて草むらに倒れてしまったこと。

辛いことを思い出し、とめどなく涙をこぼす少女に男は「それは大変だったね」という同情を装いながら、笑う。

(バカめ。ここにきて助かったと思ったんだろ？ が違うんだぜ。本当の地獄はここから



始まるんだ)

ひとしきり涙を流し少しだけ気が晴れた少女に、男が襲い掛かろうとした。その時だった。

——待てよ。このままこの少女おんなを犯したら、お前も強姦しようとした叔父とかいう奴と同類になつてしまふぜ。

(で、でも俺もこの子を犯そう家に連れてきたんだ。このまま手を出さないわけにも)

——豚は肥えさせて食うもんなんだよ。ここで少女おんなを犯してもたかが知れているぜ。そして少女おんなの叔父とかいう低俗な奴と同じになつちまう。それよりもその叔父とかいう奴よりもお前が高尚なのを見せつけてから犯した方がカッコいいというもんだぜ。

(なるほど。確かに一理あるな)

悪魔のアドバイスに納得した男は少女に「三年前に父が死んでここには俺しか住んでいないんだ。今日から自分の家だと思つてくれたらいい。まずは風呂に入りなよ」と言葉かけた。

少女は困惑した様子だったが結局は男の申し出を受け入れお礼を言うと風呂場に向かった。

「これでいいのか？俺の中の悪魔」

一人になつたりビングで、男は自分の中にいる悪魔に語りかけた。

——そうだ、それでいい。いいか、豚は肥えさせて食べえ。これを忘れるなよ。  
「ああ」

風呂場の方角を見ながら、男は邪悪な笑みを浮かべた。

それから数年後。

「ええ、こ、こんなところで……」と恥ずかしがる成人した少女を初めてあつた草むらに連れ込み、男は犯した。

トラウマを持つ女性に嫌なことを思い出させないよう優しく、慈しむように。

魔法少女シャイニングピースくどうだ、この熱々の長い  
○○○の味は

???

漫画などで描写される宇宙戦艦の一室のような場所に、150センチに満たない小柄な少女が、両手を万歳する形で天井から釣り下がる鎖で拘束されていた。

「あああ、あがががががっ!! (放して! 放しなさいよっ!!)」

明るいピンク色の髪をポニーテールでまとめた少女の口は固定具で無理やり開かされていた。唇を閉じることができないので口の中に溜まった唾液が口の端から零れていく。

魔法少女シャイニングピース。

異世界から異形の者達から人々を守るために神の祝福を受けた正義のヒロインである。

ピンクと白を基調としたコスチュームを身に纏い、袖口にはひらひらとしたフリルがあしらわれている。

ただしそれは既にビリビリに破られてしまい服としてはもちろん、敵の攻撃を幾度も

守ってきた鎧としての機能を保っていなかった。乙女として見られたくない所をギリギリの所で隠しているコスチュームはむしろ男の劣情を燃え上がらせる淫靡なアイテムへと化していた。

「我々の野望を阻んできたシャイニングピースよ。今の気持ちはどうだ？」

ピースは声のした方を向く。そこにはイボイボが目立つ蛙かえるの顔に蛇のように長い胴熊のように毛深く鋭い爪が見える足、ミミズのような腕とバケモノとしか言えない異形の者が立っていた。

異形の者が話し始める。

「私は悪の組織ゲドールの地球攻略司令官、ゲドウィン。君に幾度も苦汁をなめさせられたものだよ」

「……」

敵の重要人物の登場に、ピースは警戒の色を強める。

「君は本当に強い。本当に強かった。……君を捕まえて我らの侵略母艦・コープスに連れてくるのに多くの部下が犠牲になった……」

ゲドウインははあくどい溜息をつく。

ゲドウインの言葉にピースは数時間前のことを思い出す。

（そう、確かあれは数時間前。数か月前に突然現れたゲドールと日夜戦い続ける私は今

日も街で暴れる怪人たちを倒すためにシャイニングピースに変身して戦ったんだ。

残る残党を追って人気がない郊外の廃工場に入った所で多数の戦闘員と怪人の待ち伏せ。戦闘員クラスでも警察では歯が立たない実力。善戦する私も次第に疲労が蓄積して……やられちゃったんだ)

「さて」

そう言つてゲドウインは気味の悪い蛙のような顔をさらに気持ち悪くさせる笑みを浮かべる。

「敗者の君には罰を受けてもらおう。殺された部下の恨みを晴らす意味でも」

そう言うのと蛙面の司令官は熱く滾る長い物を取り出す。その物を見たピースは目を大きく見開く。

「あああッ！あああああッ！！（やめてッ！近寄らないでッ！！）」

目の前に出された物を見て、初めて恐怖を見せるピースは首を横に振つて逃れようとする。だが鎖で両腕を封じられている彼女に逃れる術はない。

「ククク、そうだ。恐怖しろ……我々を恐怖に陥れた正義のヒロインがなす術もなく恐怖に怯え、苦しみ、もがくほど……我らの溜飲が下がるといふもの……さあ、啜えるんだ」

「ああッ（嫌よッ）！！」

唯一自由な首を動かして逃れるピース。しかしそれも岩をも砕くのではないかと思うほど頭を掴まれては動きを止めるしかない。その所を狙われ、固定具で閉じることが出来ない口に熱く長い物を啜えさせられた。

「ううツ！ううう！うううううツ！！（熱いツ！やめて！入れないでツ！！）」  
 「くつくつく、どうだ……熱いか？熱かるう？」

苦しむ魔法少女に、ゲドウィンはニヤツとイヤらしい笑みを浮かべる。

「この熱々に熱せられた長いちくわが喉元まで犯し、ちくわの穴からこぼれ出る熱々のお出汁の味は？」

（嫌よ！こんなダ〇ヨウ倶楽部さんや出川〇郎さんがやるようなことを何で私がしないといけないの!!）

「くつくつく……今では見なくなつた熱々おでんの体当たり芸を正義の美少女ヒロインがする。そしてその苦しむ顔……実に愉快なものだ！」

悪の司令官の悪行は止まらない。

「さあ、次は外側が冷めていると思つて噛み千切つたら中から熱い液体が零れるこぼという悪魔の食べ物、小龍包シヨウロンポウだ！」

「あああ、うう……うう……あああううツ！！（お願い、誰か……誰か……助けてツ！！）」

固定具で言葉にならない声で助けを求める魔法少女。しかし彼女の願いをまともに

聞く者など、悪の組織の本拠地には存在しない。例え固定具がなかったにしても。

悪の組織、ゲドールの侵略母艦コープスではその後も熱々のゆで卵やガンモを啜えさせられ苦しむ魔法少女のくぐもった声が続いた。

魔法少女シャイニングピース～お願いだから、私を犯してよ!～

戦う術を持たぬ人々を守るため神の祝福を受けた魔法少女、シャイニングピースは地球侵略を企む悪の組織ゲドールの司令官のゲドウインの消耗作戦によって耐えがたい拷問を受けていた。

両手は万歳をするように吊るされ、口は閉じられないように固定具をつけられている。その開きっぱなしの口に異形としか言いようがない男が太く長いもの、熱々のちくわを啜えさせて犯していた。

「ふふふ、どうだ。シャイニングピース」

ゲドウインはちくわを可愛らしい魔法少女の口から名残惜しそうに取り出すと少女の顔を覗きこむ。

「……ッ!」

シャイニングピースはキツと睨み付ける。双眸からはとめどなく涙を流しているがその奥には鬨みの炎は消えてはいなかった。

「ククク、さすがは人間どもを守るために神からの祝福を受けたことだけはある。それ



では次は——」

「甘いわね、ゲドウイン。それが数々の星を知略で滅ぼしてきた男のすることかしら？  
容姿と違つて」

カツカツと音を鳴らしながら現れたのは整つた容姿に猫のように吊り上つた眼が印象的な黒い長髪の女性だった。その女性を見てシャイニングピースは嫌悪感を露わにする。その理由は彼女の身体からにじみ出る邪悪なオーラとその恰好だった。

彼女が身に着けていたものが多くの人間が思い浮かべるであろう魔法使いが着ている不気味な帽子と黒いマント。バスケットボールほどの双乳、無駄な脂肪一つなくびれた腰回り、ぷりんと張りのある臀部。

それらのはつきりと分かる、乳首と股の部分をかろうじて隠しているとしか言いようがないV字の布だったからだ。

「ほおお。これはこれは幾百幾千の敵を殺したが、それ以上にその娼婦も赤面する扇情的な恰好で幾千幾万の敵を食つた大魔女のデスエンド殿ではないですか」

ケツと唾を吐くゲドウインにデスエンドと呼ばれた女は「ふふつ」と笑つて受け流す。「せつかくの獲物もこんな扱いでは……」

ニヤリとサデイステックな笑みを浮かべるデスエンド。そんな魔女を聖なる魔法少女はギツときつい視線を送る。そんなシャイニングピースにひるむことなくニヤリと

した笑みのままデスエンドは言い放つ。

「こういった女には外はカリカリ中はとろろりな熱々の焼きたてたこ焼きを啜えさせるのが一番よ。これに勝るものはこの世に存在しないわ」

「……………」

魔法の予想外の言葉に聖なる魔法少女が放心する。

ドシン、ドシン

「やれやれ、デスエンド。おめえもそのカエルと同じで分かっていないなあ」

「お前は…………」

デスエンドが振り返ると、そこには白目の二足歩行の巨大な狼が立っていた。口からポタポタと涎こぼす姿は今にも獲物の腸を食はらわたい破らんとする狂気さがにじみ出していた。

「これはこれは。幾千幾万の強者をその牙と爪で切り裂いてきたけど無抵抗の女子供老人をその数倍食い殺した暴食野蛮のヘルウォルフ殿」

新たに現れた敵幹部はシャイニングピースを見ながらじゅるりと舌なめずりをする。

(ま、負けるものですか!)

一瞬ひるみつつもすぐに抵抗する炎を燃え上がらせるシャイニングピース。そんなシャイニングピースに「ケケケ、いいメスだぜ」と呟いてからカエルと魔法に語る。

「お前らはわかかっていないねえ。こういった女にはトロトロの餡が滴る揚げ春巻を啜え

させるのが相場で決まっているんだよ」

「……………」

（お前もかよ!!）

二足歩行の狼に突つ込むシャイニングピース。そのときだった。

「馬鹿ヤロウ!!」 それでもゲドールの幹部か、貴様ら!!」

天を震わす大声に三人の幹部が片膝をついて恭しく頭を下げる。

（こいつが、ボス…………）

豊かな黒いアゴ髭を蓄え、戦車の胴体。そして三人の幹部を凌駕する威圧感と邪悪なオーラにシャイニングピースは新たに現れた男が敵組織の総大将だと悟る。

「ではジャステイスカウンター様はどうするのがよろしいのです?」

二足歩行の狼の言葉に黒髭戦車は嬉しそうに語りだす。

「こういう女には肉まんを胸に仕込むのがロマンというものよ。こんな慎ましきな胸の女には特に、な」

（……………ここにはバカしかいないのか）

聖なる魔法少女は心の中で何かが崩れ落ちる音を聞いた。しかし彼女にとって地獄はまだ続く。

「はあ? ジャステイスカウンター様……………何をおっしゃられるのです? このような女には

熱々のちくわを啜えさせるのが一番いいのですよ」

「あら、何を言っているのはゲドウィンもよ。たこ焼きこそこの女を苦しめる最上のもよ」

「エロ女も黙っている。春巻に決まっているだろう!」

ダダダダダダダダダダッツツツ!!!

「ほう、お前ら。この俺に逆らおうと?」

両腕のガトリング砲を三人の部下の足元に放つジャステイスカウンター。しかし三人はひるむことなくジャステイスカウンターをにらみ返した。

「いいだろう。誰が正しいか、力で決めようじゃないか!!」

ジャステイスカウンターの言葉によつて四人はシャイニングピースをよそに戦艦を大きく揺るがすほどの闘争を開始した。

そんな四人を見ながらシャイニングピースは心の中で叫んだ。

お願いだから……そんなアホらしいことじゃなくて普通に犯しなさいよ!……  
お願いだからエロゲーみたいに私を犯しなさいよ!!  
と。

魔法少女シャイニングピースを我妻（あづま）深雪（みゆき）が視聴していたら

マジで、放送事故が多いけど、気にしないことで有名なTV局、MHKの楽屋で可愛い体当たりアイドルの地位を確立しつつある美少女、我妻深雪はメモを取りながら備え付けのテレビを見ていた。

『この放送は『死ねば助かるのに』、『狂気の沙汰ほど面白い』赤木製菓の提供でお送りしました』

「すばらしいわ」

『来週は怒りの美少女戦士ヴァイスバスター〜引き裂かれる聖なる衣〜をお送りします』と次の番宣になったところで深雪はテレビのスイッチを切った。その顔には微笑が浮かび上がっていた。

「でも甘いわね」

微笑から一変。少し悲しげな瞳を浮かべて、続ける。

「たこ焼きや揚げ春巻、肉まんも悪くないけど……こう言う時は、大概おでんの大根を用意するものよ。熱々のおつゆを染み込ませた大根をゆつくりと近づけ、湯気とあのこげ

茶色に染みる大根を見せ付けることで恐怖心をあおる。その効果は絶大だわ。もし目隠しした状態でそれを近づけたら熱気だけで漏らしてしまいうくらいに。それを知らない所を見ると、このシナリオを書いた脚本家は熱々おでん大根を味わったことがないよね（リアクション的な意味で）」

フツと苦笑を漏らし、深雪は続ける。

「あと私なら敵幹部をもう一人増やして太めの布ゴムパチンコをシャイニングピースに啜えさせるように提案させるわね。あのゴムが徐々に伸びていく緊張感。いつ自分に向かってくるか分からない恐怖。これによって視聴者の『清らかな美少女がリアクション芸人のように痛がる』という精神的開放カタルシスを味わわせることができるのに。シャイニングピース役の月野まどかが私同様『汚してしまいたい!』という人間の嗜虐心を刺激する可愛らしい顔をしているだけに……惜しい。本当に惜しいわ……」

深雪は顎に手を置いて思案する。

「それと目隠しをして近くで焼肉をするというのも面白いかも……。熱く熱せられた鉄板の近くに立たせて肉がジュージューと焦げる音を聞かせる。……コップの水を垂らして蒸発する音を聞かせるというのでもいいわね。それによって目隠しされた美少女に『この鉄板の上に立たされるのではないのか?』という恐怖を抱かせる。その姿を想像するだけで……ああ、ご飯三杯はいけそうだわ!」

自分の想像に深雪は思わず自身の肩を抱く。

深雪さ〜ん！ 準備ができました！ すぐにスタジオに来てください！！

スタッフの呼びかけに深雪は大きく深呼吸をしてドアに向かった。

子どもだろうが老人だろうがいじっていじっていじりまくることでも有名なお笑いコンビ、タウンダウンにいじられ倒されるために。

# 悪堕ちの女勇者ミレイア～正義の刃が悪へと変わる（前編）

文明というものが始まる以前から、人は魔物と呼ばれる異形の者と戦い続けた。

しかし魔物は人よりも何倍も身体能力に優れ、中には魔法と呼ばれる未知の術に長けた個体も存在した。その力は凄まじく魔物が来れば戦う術を知らない者は逃げるしか方法がなかった。もし魔物の数が人間と同等であったのなら、人類は魔物に滅ぼされていたか奴隷になっていたかの二択しか残されていなかっただろう。

だがそんな人類にも希望があった。

勇者。

神から祝福を受けた選ばれし者の名前。

勇者は聖なる力で魔物を凌駕する身体能力だけではなく一度に多くの魔物を滅する魔法、瀕死の怪我を一瞬にして回復してしまう魔法を持っていた。

その力は凄まじく、我が物顔で蹂躪していた魔物が勇者の名前を聞くだけで逃げ出すほどだった。中には人間を恐怖のどん底に陥れた魔物という自負から勇者に挑む者もいたが、生きて帰った者はいなかった。







首を刈り取るには十分すぎる巨大な鎌を持った、フード付きのローブを纏った上半身のみの骸骨が玉座に座る男に向かって膝を折る。

「どうした？ デスランス」

黒髪短髪オールバックにがっしりとした肉体を包み込むタキシードに黒マント服の服装。頬骨や顎のラインがはつきりしていて、がっしりとした骨格を感じさせるくつきりした顔の輪郭。彫りが深く目鼻立ちがはつきりしている濃い顔立ちは腹心に笑顔で尋ねる。

「斥候の報告によると勇者がこの魔王城にむかってきてきているとのこと。如何しましょう？」

「そうだな」

魔王と呼ばれた男は顎に手を置いて思案する。

「久しぶりの客人だ。これは無礼のないように丁寧にしてお出迎えしなければならぬ」

「ああ。他の四天王、および住民にすぐに通達しろ。勇者を歓迎しろ。無礼のないように、な」

「ハッ！ 主の望むがままに!!」

デスランスと呼ばれる骸骨は微かに笑う魔王に会釈をすると煙のようにその場から



いつでも魔法を出せるように警戒しながらミレイアは頭を下げる。

「それでは魔王城までご案内します！ 竜騎兵!!」

ガリバが振り返り叫ぶと二足歩行の竜に騎乗したゴブリンが現れた。竜の背中には馬車を牽引する縄がつけられていた。

「ボルド。丁重に魔王城までにお連れしろ。丁重にな」

「ハッ!」

ボルドと呼ばれたゴブリンは巨軀きょくのオークに敬礼で返す。

「い、いえ。ご心配に及ばず。歩いていきますので!!」

両手を前に出し、首を大きく横に振って断るミレイア。

「そういうわけにはいきません!」

そんな女勇者に巨軀のオークはあわてふためく。

「魔王様から無礼のないように歓迎しろと厳命を受けております。魔王城にたどり着くまでの間怪我をされては困りますし、なによりここから魔王城までは距離があります。勇者殿も長旅で疲れておられるでしょう。そんな勇者殿に疲れさすような真似をさせれば、このガリバ……首を刎ねられてしまいます!!」

そう言う巨軀のオークは地響きが起きるのでは錯覚する勢いで地面に膝をつき、頭を下げる。

「どうか勇者殿！ このガリバの顔を立てると思つてどうか!!」

「わ、わかりました……」

自分が見上げるほどの巨躯のオークが涙を流しながら頭を下げる姿に引け目を感じたミレイアは牽引するゴブリンに「では。魔王城までお願いします」と声をかけると馬車に乗り込んだ。

「勇者様、頑張つて!」、  
「元気でな、勇者殿!」、  
「また会おうね!」

馬車に乗り込んだ女勇者に向けて応援する魔物達の声は、ミレイアが魔王城に入城するまでやむことはなかった。

# 催眠術に目覚めた男子生徒の凶行く穢されたマドンナく

僕の名前は上子氏哲。かみこしてつどこにでもいる普通の高校生です。強いて違う所と言えば……早起きですかね。いつも朝早く起きるから朝早く朝ごはんを食べて朝早く学校に行きます。朝早く学校に行ってもやることがないので教室を掃除してます。だって綺麗な教室で勉強したいものではないでしょうか？

そんな僕にも一つだけ楽しみが出来ました。それは

「おはよう、上子氏君。今日も早いのね」

「あ、有栖川さん。おはよう」

黒板を拭いていた僕に背中まで届く黒髪が特徴的な女性が話しかけた。

ありすがわさくや  
有栖川咲夜。

膨らむべきところは十分に突出しているが、胸もプリツとした尻も見事に上を向いていた。清楚な感じとは反比例する野生的な魅力が満載のナイスバディだった。

「私も手伝うね」

そう言う和有栖川さんは掃除ロッカーからホウキを取り出すと僕が掃いていない箇所を掃除し始める。そんな彼女を見て僕の心は綻ぶ。

「ただ、僕の心に黒い感情が日に日に増していた。彼女の肢体を思うがまま貪り尽くしたい。」

「そんな思いが抑えきれず、いつそんな凶行を犯してしまうのか恐れるほどに。そんなある日。」

|||||

「あれ？」

「気がつくと僕は屋上に立っていた。」

「……」

「目の前には虚ろな目をしたままその場に立ち尽くす有栖川さんの姿があった。」

「なんで僕はこんな所にいるんだ？ いや、そもそも何で有栖川さんが虚ろな目をしたまま立ち尽くしているんだ……え？」

「何から何まで分からない状況に混乱した、その時だった。」

「——そうだ。僕はある日突然催眠術に目覚めたんだ。そしてその催眠術を使って有栖川さんを屋上に呼び寄せたんだ。」

「な、何なんだ!?!」

「突然脳内に響く自分の声に僕は戸惑う。そんな僕に脳内に響く僕の声は続ける。」



——有栖川さんを僕の欲望の思うがままにするために。

「有栖川さんを……思うがまま……」

脳内に響く自分の声に、僕はゴクンとカラカラになった喉に唾液を送り込むと改めて憧れの有栖川さんを見る。

「そうだ、今の僕は彼女を蹂躪出来るんだ……いや、よく考えたらいくら放課後だと言ってもここでヤツてしまうのは色々と危ないんじゃないのかな？」

「……ッ!？」

その言葉に有栖川さんの身体がビクツと動く。

「やはり催眠状態と言っても見たり聞いたりする意識はあるみたいだな……それに有栖川さんは恵まれていて下手に手を出したことがバレたりしたら僕の学校生活……いや人生は破滅するかもしれない」

それに、と僕は顎に手を置く。

「そもそも催眠術をかける勇気があるなら普通に話しかけているよな」

うん、そうだ。と僕はとある結論を導き出す。

「よし。さつさと催眠を解いてこのままなかつたことで終わらせ、え——」

その時。先ほどまで虚ろな目をした有栖川さんの目から赤い閃光が放たれた。その閃光を見た瞬間、僕の意識はテレビの主電源を切ったかのように途切れてしまった。





「あれ?」

僕は目を覚ます。見渡すとそこは屋上、そして虚ろな目をして立ち尽くす有栖川さんの姿があった。

「なんで僕はここに? ……そうだ! 突然催眠術を覚えた僕は有栖川さんを屋上に呼び出して催眠術をかけたんだ。そしてやっぱり止めようとしたんだけど『せっかく催眠術を覚えたんだから催眠状態になっている有栖川さんの身体に触ってエロいことをしよう』と思い直すことにしたんだった」

確かめるように呟くと、僕は虚ろな目をして立ち尽くす有栖川さんの手を握った。

「有栖川さんの手……小さくて温かいなあ」

「……ッ!? (ちがうくう!! い、いや……嬉しいけどそうじゃないでしょう!?)」

「まるで生きた彫刻のようだ。ミロのヴィーナスって両腕がなくなっているけど、もしかしたら有栖川さんのような手をしていたのかもしれないなあ」

「……ッ!? (え、何その褒め言葉……すごい嬉しいんだけど!! ……あ、でも上子氏君の手。男らしくて熱い。細い体つきだから想像できないけど……) つごつして立派だ。……緊張しているのかな? すごく震えていて……可愛い。でももつと触って。

そう……手だけじゃなくてもつと別の所を……」

「よし。有栖川さんの手を握ってもう満足だ。催眠状態を解除してもう催眠は止めよう。え——」

その時。有栖川さんの目から赤い閃光が放たれた。その閃光を見た瞬間、僕の意識は後頭部を硬い物で殴られて気絶するかのように途切れてしまった。

|||||

「あれ？」

僕は目を覚めます。見渡すとそこは屋上、そして虚ろな目をして立ち尽くす有栖川さんの姿があった。

「なんで僕はここに？ ……そうだ！ 突然催眠術を覚えた僕は有栖川さんを屋上に呼び出して催眠術をかけたんだ。そして手を握ったところで止めようとしたんだけど『せっかく催眠術を覚えたんだから催眠状態になっている有栖川さんを欲望のままに汚してやろう』と思い直すことにしたんだった」

そう確かめるように呟いた僕は上の制服を脱いで綺麗にはたいた後に床に置く。

「有栖川さん。この制服の上のうち伏せになるんだ！」

「……はい。……わかりました」

虚ろな目をしたまま、有栖川さんはポツリポツリと言うと僕が先ほどまで着ていた制

服にうつ伏せになった。

「よし。思う存分触ってやるぞ！」

僕は膝をつけて肩甲骨の窪みを両手の親指で押し込んだ。

「ふふふ。やっぱり凝ってやがる。服の上からでも分かるくらいの大きさだもんな」

予想通りの筋肉の凝りに僕は笑った。もし鏡があれば、僕は邪悪な笑みを浮かべていたことだろう。なぜならば誰も触つたことがないだろう、学園のマドンナの有栖川さんの肩甲骨に親指を当ててマッサージをしているのだから。しかも本人の意思を無視して。

「ふふふ。いい、実にいい！ やればやるほど凝りがほぐれていく!!」

徐々に柔らかくなっていく肩の筋肉に愉悦を漏らした僕は次に彼女の下半身に移動する。

「ふふふ。次は……ここだ！」

そう言うとは僕是有栖川さんの靴下と上履きを脱ぎ取ると隠す物がなくなった有栖川さんの足の裏を指で押した。

「ふふふ。足は第二の心臓と呼ばれるほど多くのツボを持っている。その中でも足の裏には様々なツボが存在する。さあつ、僕の手によってどんどん気持ちよくなるがいい（体調が）！」



「あれ?」

僕は目を覚めます。見渡すとそこは屋上、そして虚ろな目をして立ち尽くす有栖川さんの姿があった。

「なんで僕はここに? ……そうだ! 突然催眠術を覚えた僕は有栖川さんを屋上に呼び出して催眠術をかけたんだ。そしてマツサージと言う名の凌辱を犯した罪で自殺を図ろうとしたんだけど『もつと催眠術で彼女をおもうがままにしよう』と思い直すことにしたんだった」

そう思い出すように呟いた僕は、改めて虚ろな目で立ち尽くす有栖川さんを見る。

「そうだ。せつかく催眠術を覚えたんだ!」

覚悟を決めた僕は催眠状態の有栖川さんに命令を下した。

「あ、有栖川さん! 僕のことを好きに……いや、嫌いにならないで下さい! 前より仲良くしてなんて言わない……今まで通りでいいです! 嫌いにならないで下さい!!」

僕は柔軟でもしているのかというくらい、頭を下げた。次の瞬間

ぶははははははあああああつっつ!!!

有栖川さんの顔が燃え盛る炎のように真っ赤になったかと思うと口、鼻……目、耳から大量の血が噴き出した。

「うわあああああつっつ!! 有栖川さんから大量の血があああ!! ……やつぱりそん



なにイヤだった!？」

「大丈夫。問題ないわ。これはただの吐血と鼻血と血涙と耳垂れだから。もう無理、上子氏君持って帰る。一生大事にするから。だから私の物になって」

「え、有栖川さん。もしかして催眠状態になってなかった？ ……うわあああああつつつつ!？」

## 僕の目の前で彼女は寝取られる……

僕の名前はすぎもとしんや相本新矢。黒髪の短髪で、おとなしそうな外見の色白、同世代の平均よりやや低めの小柄な体格で脆弱そうな印象の、どこにでもいる普通の大学生。強いて違う所を挙げるならば、うねめい宇根暝という彼女と付き合っていること。

暝は頭は決して良いとは言えないものの、いつも笑顔で周りを明るくするオーラを放ち、多くの者に慕われ、可愛がられていた。

また外見もいい。肌は透き通るように白く、丸い小顔の中で、まるで隙だらけみたいなかわいいタレ目が見る者の気持ちやを穏やかにさせる。

ちよつと低めにも見える鼻筋も愛嬌がある。小さくてぷっくりとした唇も、普段彼女が見せる笑顔のために存在しているかのように自然で、惹きつけられるチャームポイントになっている。

背中まである黒髪は絹のように美しい。

また彼女はスタイルもすごかった。

170センチほどの長身に加えて、モデルのようにすらつとした長い脚。キュツとくびれた腰の細さ。そして視点を上に向ければ、着ている服のボタンを弾き飛ばして飛び

出てくるのではないかと錯覚し、歩けばゆっつきゆっつきと揺れているのが分かるほど大きく膨らんだ胸元は、多くの男達の視線の的となっている。

バストとウエストの凹凸の激しさは日本人離れしており、すれ違えば誰もが振り返るような抜群のプロポーションである。

顔やスタイルだけではなく、誰にでも等しく接する明るい暝。僕にとつて自分の命よりも大事だと言える暝。

そんな大事な彼女は……いま目の前で苦しんでいた。

190センチ近くある、縦にも横にも大きい男が暝の肩を掴むと、見た目通りのバカ力で暝を地面に叩きつけたのだ。

「うう……」

今すぐにも立ち上がろうとする暝。しかしそれよりも早く、男は暝に覆い被さる。

「うう……！　くう……！」

男をはね除けて逃れようと必死にもがく暝。しかし男はその抵抗を楽しむかのように小さく笑うと、暝を遙かに上回る体格と体重で彼女の抵抗を押さえつけていく。

「くう……！　この、このお……」

それでも諦めず必死に動いて押さえ込む男から逃れようと粘る。しかしとりもちのようには絡み付きながら押さえ込む男に、暝の体力はみるみる奪われる。そして抵抗

する意思も、体力も失われたその時。

ピーーーーーッ!!

電光掲示板からけたたましい電子音があった。

「そこまで!」

決着を告げる審判の合図に、男はゆっくりと瞑から離れて少しだけ着崩れた胴着を直す。

瞑も肩で息をしながら乱れた胴着を直し、さきほどまで自分に覆い被さっていた男と向き合うように礼をした。

こうして瞑の男女混合無差別級柔道大会は一回戦で幕を下ろした。僕は自分の命よりも大事な彼女が寝技で一本取られるのを、ただ黙って見ていることしか出来なかった。

## デスランスの恐るべき技（という名前の黒歴史）

人間が様々な国に分かれてしのぎを削っているのと同様に、優れた身体能力と未知なる魔法を駆使する存在もいる魔物も一枚岩とは言えなかった。

自分こそが！ と頂点に立とうと魔物同士で血で血を洗う闘争を繰り広げられていた。

数こそ人間に劣るもののそれを凌駕する能力を持つ魔物。しかしそんな彼らが人間をせん滅、もしくは支配出来ていなかったのにはそういう理由があった。

後に現れる魔王の存在によって魔物は一つにまとまるのだが……これはその魔王が自らを『魔王』と名乗り魔物を統率し始めようとした矢先の話である。

|||||

|||  
魔王軍本陣。

「はむむ」

勢力を表す駒が置かれた地図をじっと見る魔王四天王筆頭にして反乱鎮圧軍の総大将を務めるガイコツ<sup>死</sup>神<sup>神</sup>、デスランスは顎に手を置いて考えていた。

「敵は我が主である魔王様が成敗した賊軍の息子で竜の血を引くウオーラウオン。その竜の血の名に惹かれて賊軍に加わった者は我が軍の五倍。……どうしたものか……」

デスランスは自分がいる本陣より先にある三つの旗に目を移す。

「幸い魔王様の妹君であるブンメーラ、百喰野獣の異名を持つ狼男のリングス、目にも映らぬ速さで刀を振るう神剣の直刀を恐れてか敵は総攻撃をする気配はない。……この状況を利用して敵に圧迫をかけつつ調略によって切り崩していくのが最上の策……しかしこのままでは中立を保つ者が反乱軍に加わる恐れがある……しかし決戦を挑んで大被害を受ければ第二、第三の反乱軍が生まれる危険性がある……。またこちらの犠牲を最小限に反乱を鎮圧したとしても後に勢力として組み込むことができる反乱軍の犠牲が大きければ人間どもを活気づけることにもなりかねない……」

魔王軍、反乱軍双方ともに損害を少なくしかつ迅速に事態を収束させる。

その難しすぎる問題に悩むデスランス。

「よし、ここは敵の前線にいる部隊に『お前らは捨て駒。仮にこの戦いに勝っても用済みになれ濡れ衣を着せられて皆殺しにされる』という情報を流させよう。そうやって反乱軍全体を動揺させウオーラウオンの首を素早く奪う。これでいこう」

デスランスが自分の考えた作戦を実行に移そうと部下を呼ぼうとした、その時だった。



ア、ブンメーラが二メートルを超える筋肉質な肉体を持つ狼男に怒鳴る。

「はあ!? 俺のせいにする気かよ!? 大体、敵の挑発に真っ先に乗ったのは直刀だろ!!」

そう言っつてリングスは平均的な中学生女子よりも背が低い、旧日本軍のような格好をした灰色の肌で左の眼球がえぐれたゾンビ、直刀に言い放つ。

「何を言うか! そもそも『敵を倒してさっさと帰りましょうよ』と勝手に部隊を前に出したのはブンメーラだろう!!」

敵に包囲され引き連れたわずかな部下は戦死、もしくは逃亡という危機的状況にもかかわらず三人は自分以外の仲間に責任を擦り付けあつていた。

「ククク、こんな奴らが魔王軍の重鎮じゆうちんとはな」

黒い鱗に覆われた巨大な竜、反乱軍の首領のウオーラウオンは侮蔑の笑みを浮かべる。

敵の大將が現れても言い争う三人を見てウオーラウオンは首をクイツと動かす。その意図を汲くんだ部下は一齐に三人に向けて魔力を溜める。

ウオーラウオンも口に魔力を溜める。

「死ね!」

ウオーラウオンの口から禍々まがまがしい巨大な赤黒い光線が三人に向けて放たれる。

ウオーラウオンの攻撃を合図に魔力を溜めていた部下も各々の魔法を発射させる。



言い争いを続ける三人はこの攻撃に対応できず跡形もなくこの世から消える。

そう考えウオーラウオンをはじめとする反乱軍は笑みを浮かべる。だがその笑みが絶望へと変わる。

「ふふ、本当にバカつて可愛いわね」

背中まであるふわりとした金髪のヴァンパイア、ブンメーラが閉じていた背中中の翼を広げた瞬間、三人に命中するはずだった魔法は魔力に変換されて彼女の翼に吸収された。

「……………」

山一つ吹き飛ばす自分の魔法光線と氷、炎、電撃といった部下の魔法攻撃が瞬く間に吸収されてしまった信じられない絶望的な光景にウオーラウオンを始めとする反乱軍は言葉を失った。

しかし。本当の絶望はこれからだった。

「シエ防衛強化呪文！ ダ攻撃増幅呪文！ ド速度強化呪文！」

ブンメーラは瞬時にかつ同時に複数の魔法を自分と仲間二人にかけていく。

三人の体に防御力、攻撃力、速度が上昇したことを表す緑、赤、青のオーラが立ち昇る。

「ク牙の旋風！！」

狼男のリングスの長い爪が縦横無尽に振り回る。彼の強靱な腕から発せられる幾つもの巨大な旋風が包囲している敵に襲い掛かる。

突然襲い掛かる旋風に魔物は竜巻に巻き込まれた木の葉のように高々と舞い上がり、地面に激突していく。

それでも何とか耐えきる魔物を

「千人両断!!」

目にも留まらぬ速さで戦場を駆けるゾンビ、直刀の刀から放たれる目にも映らぬ刀身によつて瞬く間に切り伏せられていく。

「く、くく……クソがアツ!!」

数十秒前までは勝ちの動かない絶対的優位からの絶望的敗北を受け入れることができず、巨大竜ウオーラウオンはスタミナのことを考えず口から強力な魔法弾を発射した。

「悪あがきなんて……見苦しいわね」

「そう言うな。絶望こん的状况なになれば誰だつてこうなる」

「ならば偉大なる竜の血を引く者へのせめてもの手た向けむだ」

ブンメーラは苦も無く迫りくる魔法弾を吸収するとリングスの爪、直刀の刀に吸収した魔力と自身の魔力を乗せた。

「三天王の断罪!!」

リングスの爪と直刀の刀がウオーラウオンめがけて振り下ろされる。次の瞬間、巨大竜の身体はまるで包丁で豆腐を切ったかのように切断され、崩れ落ちた。切断された所から血の雨が降り注ぐ。

マダダ……マダ……オワランゾ!!

だがまだ終わってはいなかった。ブツブツという音を立てて腐りながらも切断された箇所がミミズのような糸状のものを出して互いの切断箇所をくっつけていく。

u l o o o o o l o l o l o o !!

理性を失い、自分が何者かすら分からなくなつた破壊衝動のみのバケモノ……ドラゴンゾンビになつたウオーラウオンは不気味な緑色の涎よだれを垂らす。

ジユウウウツ!

涎が落ちた先にあつた大岩が溶けて消滅する。

u l o o o o o l o l o l o o !!

つい先ほどまで戦っていた敵すら忘れてしまった屍巨大竜は、岩をも溶かす涎をまき散らしながら三人めがけて突進する。が、すぐにその足は止まる。

なぜならそこには自分を遥かに超える、下半身のないフード付きのローブを纏つた巨大な死神が突如として現れたからだ。



「……私はネーミングセンスがない」

ウオーラウオンとの戦いを見ていた者たちの噂話を聞き、デスランスは落ち込んでいた。

しかしこんな個人的なことで悩んでいてはいけないそう思ったデスランスは今後の魔王軍運営の参考にしようとして東方の文献を読み漁る。

「ん？」

そんな彼の目に留まる。それは東方に存在する死神の記述だった。

デスランスは食い入るようにその資料を読む。

「なるほど。東方にも死神が存在してその中には『ほんかい正解』という必殺技を持つ者もいるのか……」

おもむろにデスランスは立ち上がると傍らに置いた大鎌を手にとって不必要なほどにクルクル回す。

「正解！ 巨大な死神の鎌！ ……うゝむ」

デスランスは首をかしげる。

「なんかこう……かつこよさが足りないな。もう少し溜めてみるか。正解！ ……巨大な死神の鎌!!」

デスランスは小さくガッツポーズをする。

「よしいける！ もう少し練習すればよりかっこよく……ッ!!」

バツ！ とデスランスは振り返る。そこには腹を抱えつつ口に手を当てて笑い声を抑える四天王三人の姿があつた。

翌日。魔王を始めとする魔王軍で「正解！」と言いながら決めポーズをするのがブームとなった。

その間、デスランスは

「……………」

白骨死体のように無言を貫いていた。

へへへ、安心しろ。すぐに楽しい所に連れて行ってやる  
からなく屈強な男たちに突然拉致された私

あれは私が16歳の時に起きた忘れられない……夏の思い出。

成人してどこにでもある中小企業に就職しそこで出会った男性、後に夫となる人との間に子どもが出来た今でも忘れることの出来ない……夏の思い出。

10年前。8月。

「スゴい！これが東京なのね!!」

この日のために両親から「末の妹だからってお姉ちゃんや近所の子のお下がりにやお前も嫌だろう」と買ってもらったお気に入りのワンピースを着て電車やバスを乗り継ぐこと数時間。電車から見える光景に私は感激しました。

田園や緑豊かな山々が見飽きた私にとって、生まれて初めての東京観光に私は浮かれています。この時何者かが私に気づかれぬ距離で私を窺うかがっていたことに気づかないほどに。さらに運悪く私は色々な所を探索していくうちに人通りの少ない脇道を歩いていたので。

「あれ………は？　ッ!？」

気づいた時には私は後ろから羽交い絞めにされた上に口を塞がれてしまいました。

「あれ、もしかして初めて東京都会に来た田舎者かな?」

「だとしたらお嬢ちゃんが悪いんだよ」

「一人でこんな脇道場所に入り込んだんじや僕たちみたいない奴に『攫さらつて下さい』って  
言っているようなものだよ」

何が何なのか理解することができない私に浴びせられる嘲笑ちやうしやう。

「へへへ、安心しろ。すぐに楽しい所に連れて行ってやるからな」

「……は、はい…………」

目の前に現れたリーダーらしい強面こわもての男が、罨はに嵌はまった野ウサギを見る獵師のニヤニヤと笑う姿に、私は身体の奥底から震えるしかありませんでした。

「連れていけ」

「へい」

恐怖で誰かに助けを求めようと叫ぶということさえ忘れた私を、男たちは手慣れた様子で車に連れ込みました。

その後私は屈強な男たちに連れていかれ車に乗せられるとそのまま都内を観光。当時流行している服や靴、バッグなどを買ってもらいショッピングを楽しんだ後にドーム



で選手達がよく見えるVIP席へと案内され野球観戦。その後ミュージカルを楽しんだりディナーに舌鼓したうみをうったりした後に新幹線グリーン席のチケットを渡され東京駅で降ろされました。

実家に帰るとすぐに「初めての東京はどうだった？」と両親に聞かれましたが、事情をどう説明すればいいのかわからず両親には「東京観光、楽しかったよ」としか言っていないません。

あの夏の体験は一生忘れることはないでしょう。楽しかったという意味と男たちは何がしたかったのかという二つの意味で。

美人教諭カヲルく斬り裂かれた衣服と晒される素肌く

卒業式。

多くの者が旅立ち、別れを惜しみつつも新たな一步を歩きだす輝かしい日。そんな中、

「きやつ!?!」

とある女性教諭が人気のない体育倉庫のマットに倒され悲鳴をあげた。

はなやま  
華山カヲル。

多くの有名大学に生徒を進学させた名門校である私立板垣学園いたがきがくえんで教鞭を執る女性教諭である。

目尻が少し下がった優しい顔立ちで落ち着いた雰囲気を漂わせている。黒髪は口ングヘアが肩に柔らかく垂れかかっており、清流のような透明感を纏っていた。

白いブラウスにグレーのカーデイガン、スリットが入った黒い膝丈のタイトスカートを着ている。黒いストッキングに包まれたふくらはぎはスラリとしており、足首がキュツと細くしまっていた。

一見すると地味だがスタイルは抜群だ。ブラウスの胸は張り詰めており、ボタンが弾

け飛びそうになっている。それでいながら腰はしつかりとくびれて、しなやかなラインを描いていた。

そんな美人新人教師をニタニタと笑いながら見下ろす四人の影。

「いい気味だな、華山よお！」

絵に描いたような不良のリーダー、志村しむらを皮切りに隣に立っていた加藤かとうがマットに倒れるカヲルの胸ぐらを掴む。

「志村の言う通りだぜ。勉強ができる生徒ばかりえこひいきしやがつて！」

「そ、それは……あなた達の努力が足りないから……！」

「ああ！ 努力が足りないだつて？」

震える声で反論するカヲルに志村は懐からナイフを取り出す。窓から入る日差しに怪しく光る銀色の刃を、女性教諭の首元に当てる。

「4点が8点だったんだ。それでも努力が足りないっていうのかよ！」

志村の怒声が薄暗い体育倉庫に反響する。

「高木、仲本」

今にもよだれを垂らしそうなほど邪悪な笑みを浮かべた志村は後ろに立っていた太った男と中肉中背の眼鏡をかけた男の名前を呼ぶ。何をするのかわかって二人は両脇からカヲルを抱えて立たせる。

「……何をやるの?」

何をやるつもりなのか意図がわからないカヲルは今にも消え入りそうな声で尋ねる。

「『何』ってナニをやるに決まっているでしょ?」

「……え?」

何を言っているのか理解が追いつかないカヲルに両脇を抱える二人が耳元で話しかける。

「先生も疎いなあ。こんな人気のない所に囚われの美人教師にやりたくてたまらない年頃の不良男子とくれば……」

「強姦<sup>レイプ</sup>しかないでしょ?」

強姦<sup>レイプ</sup>。

その言葉を聞いた瞬間、小刻みに震えていたカヲルの肉体は石のように固まった。

「よかったなあ先生。忘れられない卒業式になるぜ」

加藤の言葉が合図だった。志村がナイフでカヲルの服を斬り裂いた。カヲルの肌に触れるか触れないかのギリギリの力加減で上の服を切り裂く。

「ひいっ!」

小さな悲鳴とともにブラジャーに包まれたむっちりとした形のいい乳房と白い肌が露わとなる。平均サイズを上回りながら重さに負けない理想的な形を保つ乳房に、「おおつ

！」と男達の視線が惹きつけられる。

「なかなかいい乳してるじゃねえか！」

「さすが学園きつての美人教諭。顔だけじゃなくおっぱいも魅力的てかあ！」

「俺好みのおっぱいだけ。こんな上物がこんな身近にあったとはねえ！」

「それじゃその先に行かせてもらおうか！」

男達の手が魅力的な二つのふくらみを包み込むブラジャーを剥ぎ取ろうと手を伸ばした。その時だった。

「お前ら！　うちのお嬢に何をしとるんじゃ!!」

体育倉庫にスキンヘッドの男を先頭に、黒い服をまとった厳つい大男たちがズカズカと入ってくる。突然現れた男達の出現に固まってしまった不良達はなす術もなく取り押さえられる。

「お嬢に手を出したんじゃ！　覚悟はできとるじゃろうのう？」

「……ああ！　あ、ああああ！　（……ひい！　お、おたすけ!）」

スキンヘッドの男が志村の口に拳銃を突っ込み、引き金を引こうとした。その時だった。

「もういい、やめな！」

カヲルの言葉に全員がカヲルに視線を向け、



げ出すようにその場を後にした。

「さてと」

カヲルは体に付着した埃などの汚れをはたき落とすと扉へと歩き出す。そして腰を抜かす不良達へ振り返る。

「志村」

「ハ、ハイッ!!」

カヲルに声をかけられ、志村は歯をガチガチ鳴らしながら答える。

「悪いんだけど。上の服、貸してくれない？」

「ハイッ!!」

自分の意思に反して激しく震える指に苦戦しながら、志村は上の服を脱いでカヲルに手渡す。

「ありがとね。明日までには自宅に届けるから」

「い、いいえ！ 差し上げます!!」

自宅に先程の男達が来訪する姿を想像し、志村は慌てて首を横に振る。

「それじゃあ、元気でね。暇ならまた学校にきて元気な顔を見せてね」

そう言つてウインクをするとカヲルは満面の笑みを浮かべて体育倉庫を後にした。

「「「ああ、あああああああああツツツツツツツツ!!」」」

不良達は恐怖で震える体を静めようと身を寄せ合うように抱きついた。



## 私の彼を取らないで！彼氏と姉の熱い吐息

私はとある地方の大学に通う3年生。私には高校時代に知り合った彼氏がいる。

高校時代、プロ野球のスカウトの目に留まった彼は育成でとある球団に入団。そこからメキメキと実力を伸ばし、ついには支配下登録を勝ち取った。

久しぶりに会えたある日。彼はふと私にこんなことを打ち明けた。

「先輩から言われたんだよね。『お前は一軍レベルで通用する肉体面フィジカルは出来ている。一軍と二軍を行ったり来たりをして、もう戦力外になってもおかしくない俺が嫉妬しつとするくらいに。でも身体を十分に使いこなせていない。それが惜しい』って」

その言葉にあることを思い出した私は彼にある提案をする。

私には舞花まいかという6歳年上の姉がいる。全国模試で名前が載るほどの頭脳と、まつ毛の長いパツチリとした黒い瞳をきらめかせ、腰まで届くほどの艶やかに長い亜麻色の髪をポニーテールにまとめた柔和な大人の女性だ。

170cmを超える高身長に全体的に無駄のない筋肉で引き締まっていながら、胸元は服のボタンが今にも飛んでしまうのではないと思うほど大きく膨らんでいる。それでいてキュツと腰がくびれて、服の上からでもはつきりと分かるほど形の整ったヒップラ

イン。モデルやセクシーアイドルと言っても通じるほどの顔立ちとスタイルを持つ才色兼備。

特長が無いのが特徴の自分とこの人は本当に実の姉妹なのだろうか？

そう時々考えてしまうほど自慢の姉だった。

そんな姉は高校卒業後にアメリカの大学に入学。大学での知識と経験を活かして現地でスポーツ科学の研究をしつつトレーナー業に就いている。その実力は実際にプロのスポーツ選手にアドバイスをするほどだ。そんな姉が長期休暇で日本に戻ってきたのだ。

自分には姉がいることをすでに教えているが、アメリカにいたということもあり紹介をしていなかった。そんな姉ならば彼の役に立てるのではないか。

そう思った私は彼に姉を紹介した。お互い紹介を終えると「ちよつと軽くバツトを持ったつもりでスイングしてみてください」と言った。その場でスイングをした彼を見た後、姉は「服の上からわかるほど身体は出来上がっているけど動きが固いわね」と言った。

その場でスイングをしただけでどこを改善するべきかを見抜いた姉に感動した彼はすぐに「ご指導お願い出来ませんか？」と頭を下げた。

そんな彼のお願いに姉は快く承諾した。

後日。大学のカフェテリアで私は高校時代からの付き合いで全国の女子大生を平均

化させた容姿の親友、ふつうのたすこ 仏宇野助子（ふつう普通の女子じよしではない）とランチをしていた。

「助子、実はね……」

私は彼に姉を紹介し、今日から姉がマンツーマンで彼を指導することになったことを伝えた。すると助子の顔が難しいものへと変化していく。

「……どうしたの、助子？」

「……」

首を傾げる私に、助子は一瞬間言うまいか悩んだ後に口を開く。

「アンタ、それってめっちゃくちやババいんじゃないの？」

「……ええ？」

意味が理解できずにポカーンとする私に助子は続ける。

「……彼って野球一筋だったわけでしょう？　それでもって初めての彼女は恋愛素人のアンタ。交際して数年。なのにキスはおろか一緒に映画を見て手を握るだけで進展してない。そんなお子ちやま同然の恋愛しかしてこなかった男にアンタのお姉さんみたいなお色気ムンムンな人が現れたらどうなる？　しかもマンツーマンと言うことは二人つきりって訳でしょう？　間違いがないって言い切れる？」

「え？ 『間違い』 って？」

意味が理解できずに目をパチパチさせる私に、助子は「……はああ！」と重いため息

を漏らす。

「アンタの彼氏がお姉さんの彼氏になっちゃうって意味よ! 要は『寝取られる』ってことよ!」

「……『寝取られ』?」

首を傾げて頭の上には? マークをいくつも浮かべる私に、助子はその意味を懇切丁寧に教える。

「……ああ、あああ……」

私は完全に青ざめ震えが止まらなくなっていた。自分の彼氏が、いつまでも隣にいてくれると思っていた彼氏がいなくなり、代わりに姉の隣に立つ姿を。その二人が幸せそうに歩いていく姿を想像して。孤独になった私を置いて。

「あとこないだお姉さんと会ったけど。普通の人なら音をあげるくらい体を鍛えているのに豊富なバストとヒップ、私の目測だとバスト92ウエスト58ヒップ90はあると思うわ。しかも顔も美人。男女比9対1というほぼ男子校の高校生活。アンタ以外の女では母親としか手を握ったことがないという免疫0ゼロの男の子は悩殺されるでしょうね」

「……………ッ!!」

自慢である姉が大好きな彼氏を誘惑して私から彼氏を奪う。その想像に絶望と恐怖

に陥った私に助子の言葉は耳に入っていないかった。

「私、二人のところへ行ってくる!!」

いてもたってもいられず、私はカフェテリアを飛び出した。

「ちよ、ちよつと! お会計!!」

遠くで助子が叫ぶ声を無視して私は走った。

目と鼻の先にある駅に飛び込むように入る。ホームにはタイミングよく電車が入り、プシュー! と扉が開いた。一目散にダッシュした私は空いている電車の中で呼吸を整えると「助子の言っていた状況になっていませんように」と必死に祈る。

焦るあまり一秒が数時間にも感じる中、駅に着いた私は急いで自宅にある防音設備のトレーニング室に向かう。

「……はあ、はあ、はあ……ッ!? ううっ……」

扉を開けようとドアノブに手を伸ばそうとしたが、急な身体の酷使で目眩めまいを起こして厚い扉に耳を当てる形でもたれかかる。その時だった。

……ハアツ、ハアツ……いいわ! そう、もつと腰を……もつと大きく動かしてえっ

!!

ハアツ、ハアツ、ハイツ! ……こ、こうですか?

アアンツ! いいわあ! そう、もつと激しく! もつと激しくうっ!!

「ッ!？」

二人の口から吐き出される、なまめ艶かしい情緒を感じずにはいられない熱い吐息に、私の疲れは吹き飛んだ。

「私の彼を取らないでッ!!」

そう扉を開けた瞬間。

「うわあっ!？」

全身に浴びせられる湿度を伴ともなった熱気に私は顔をかばって思わず仰け反る。そして。

「へ?」

二人の姿を見て、私は固まる。そこにあつたのは夏も目前なのにストーブに載せたヤカンがピーッ! とやかましく音を鳴らすほどガンガンに暑くした部屋で、フラフラプをするジャージ姿の二人が「え?」と困惑した汗まみれ顔で私を見る光景だった。

「……何を、してるの?」

状況が理解できない私はとりあえず尋ねる。

「トレーニングだけど?」

そう言って彼に「水分休憩ね」とペットボトルを手渡すと私の方へ振り返る。

「彼、次の交流戦で一軍出場が決まったらしいのよ。セ・リーグは屋外球場がほとんどだからね。暑さに慣れておくと腰回りの可動域を大きくする目的を兼ねて」

そう説明すると姉もペットボトルに手を伸ばしてゴクゴクと一気に飲み干す。

「ところで『私の彼を取らないでッ!!』って何のこと?」

「トレーニング頑張つてね!!」

私は急いで扉を閉めた。

「ま、まぎらわしいわよ……」

心臓をバクバクと鳴らし、顔を真っ赤にさせた私は扉にもたれかかるようにへたり込む。扉の向こうではトレーニングを再開したのか、二人の艶かしい熱い吐息が聞こえた。

一ヶ月後。予定通り交流戦で投手の代打で登場した彼は、姉とのマンツーマンの効果を存分に発揮した、身体全体を無駄なく使ったフルスイングで逆転ホームラン。その後の守備でもセンター前ヒットになる打球に飛び付きゲッツーにするというファインプレーをして人生初のお立ち台にあがる活躍をみせた。

だけどそれはまた別のお話。